

学校統合に伴うモンゴル民族教育の変容  
—中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に—

賽漢花

SAIHANHUA

平成 30 年度愛知県立大学大学院国際文化研究科

学位（課程博士）申請論文

学校統合に伴うモンゴル民族教育の変容  
—中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に—

愛知県立大学大学院国際文化研究科

国際文化専攻

賽漢花  
SAIHANHUA

2018 年 7 月

## 目次

第一章	序論	1
第1節	研究背景と目的	1
第2節	先行研究	2
第3節	研究方法と構成	5
第二章	モンゴル伝統教育の歴史	7
第1節	家庭教育	7
第2節	寺院教育	8
第3節	学校教育	9
第三章	内モンゴルにおける民族教育の現状	10
第1節	中国と内モンゴル地域の学校統合の基本状況	10
第2節	内モンゴルにおける民族教育の歩み	11
第3節	内モンゴル自治区における民族教育の現状	12
3.3.1	学校教育における「二言語・三言語教育政策」の展開	12
3.3.2	少数民族教育政策の内容	14
3.3.3	学校統合による民族教育の実態	15
第四章	赤峰市における民族教育の概要	16
第1節	調査地の選択理由	16
第2節	赤峰市の概要	16
4.2.1	行政と住民	17
4.2.2	赤峰市都市部	18
4.2.3	アルホルチン旗	18
4.2.4	オーハン旗	18
第3節	赤峰市の民族教育の歴史	19
4.3.1	清朝時代の赤峰市の民族教育	19
4.3.2	中華民国時代の赤峰市の民族教育	20
4.3.3	解放後の赤峰市の民族教育	20
第五章	赤峰市の牧畜地域における民族教育の現場	23
第1節	牧畜地域のモンゴル民族小・中学校の変遷と地域の特徴	23
5.1.1	アルホルチン旗のモンゴル民族学校の変遷	23
5.1.2	対象地域の特徴	24
第2節	統合前のバヤンウンドウルソムの小学校の事例	26
5.2.1	学校統合前の18校の状況	26
5.2.2	バヤンウンドウルソムの小学校の事例	26

第3節	統合後のバヤンウンドゥル小学校の事例	28
5.3.1	調査対象の学校	28
5.3.2	時間割と各教科の時間数の分析	29
5.3.3	「故郷」の時間の教育内容の分析	31
5.3.4	民族文化の伝統行事への参加状況	32
5.3.5	生徒たちの日常の寄宿生活実態	33
第4節	統合前のバヤンウンドゥル中学校の事例	35
5.4.1	調査対象の学校	35
5.4.2	時間割と各教科の時間数の分析	35
5.4.3	「活動」及び「朗読」の時間の教育内容の分析	36
5.4.4	民族文化の伝統行事への参加状況	37
5.4.5	生徒たちの牧畜地域での日常の生活実態	38
第5節	統合後のバヤンウンドゥル中学校の事例	38
5.5.1	調査対象の学校	38
5.5.2	時間割と各教科の時間数の分析	40
5.5.3	「活動」及び「朗読」の時間の教育内容の分析	41
5.5.4	民族文化の伝統行事への参加状況	42
5.5.5	生徒たちの日常寄宿生活実態	44
5.5.6	教諭の仕事の状況	45
5.5.7	進学試験による成績の変化	46
第6節	まとめ	47
5.6.1	学校統合に伴う民族小学校の変化	47
5.6.2	学校統合に伴う民族中学校の変化	48
第六章	赤峰市の都市部における民族教育の現場	50
第1節	都市部のモンゴル民族小・中学校の変遷と対象地域の特徴	50
6.1.1	都市部のモンゴル民族小・中学校の変遷	50
6.1.2	対象地域の特徴	50
第2節	赤峰市モンゴル民族実験小学校の過去	51
第3節	赤峰市モンゴル民族実験小学校の現状	52
6.3.1	調査対象の学校	52
6.3.2	時間割と各教科の時間数の分析	52
6.3.3	「民族」及び「朗読」の時間の教育内容の分析	54
6.3.4	民族文化の伝統行事への参加状況	57
6.3.5	生徒たちの日常の生活実態	57
第4節	赤峰市モンゴル民族中学校の過去	58
第5節	赤峰市モンゴル民族中学校の現状	59

6.5.1	調査対象の学校	59
6.5.2	時間割と各教科の時間数の分析	59
6.5.3	「活動」及び「自習」の時間の教育内容の分析	61
6.5.4	民族文化の伝統行事への参加状況	61
6.5.5	生徒たちの日常の寄宿生活実態	62
第6節	まとめ	63
6.6.1	都市部の小学校の変化	63
6.6.2	都市部の中学校の変化	63
第七章	赤峰市の農耕地域における民族教育の現場	65
第1節	オロインスムモンゴル民族中心小学校の変遷	65
第2節	オロインスムモンゴル民族中心小学校の事例	66
7.2.1	対象地域の特徴	66
7.2.2	統合前のオロインスムモンゴル民族中心小学校	66
第3節	学校統合後のオロインスムモンゴル民族中心小学校	67
7.3.1	対象地域の学校	67
7.3.2	時間割と各教科の時間数の分析	71
7.3.3	生徒たちの日常の寄宿生活実態	74
7.3.4	民族文化の伝統行事への参加状況	75
第4節	まとめ	76
7.4.1	学校統合による小学校の変化	76
第八章	考察と結論	77
第1節	結果のまとめ	77
8.1.1	牧畜地域の教育現場	77
8.1.2	都市部の教育現場	78
8.1.3	農耕地域の教育現場	78
第2節	牧畜地域、都市部、農耕地域の民族教育の比較	79
第3節	今後の課題	82
参考文献		86

## 第一章 序論

### 第1節 研究背景と目的

本研究の目的は、中国内モンゴル自治区における学校統合に伴う民族教育の変容を明らかにし、その変化が民族教育に対していかなる影響をもたらしたかについて、現地調査に基づき考察することである。本研究では、民族教育の定義を「それぞれの民族が自らの言語や文化を維持するために行う教育」とする。民族教育の役割について、岡本（2008：6）が「民族的マイノリティの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育は重要な要素である」と述べている。

2005 年の中国共産党中央国務院による「民族工作への強化、少数民族地区の経済社会発展に関する決定」以降、中国政府は、民族文化の振興、民族教育事業、民族人材育成を行うための財政を強化した。さらに、中国共産党第 17 期中央委員会第 6 次全体会議「文化体制改革の深化による社会主義文化大発展、大繁栄の推進に関する若干の重大問題の決定」により文化強国をめざす国家戦略が示された。その実施が中国の少数民族学校教育のモデルともなっている内モンゴルから始まっている。本研究が内モンゴルに注目する理由は、内モンゴルのケースが全国の少数民族教育に影響する可能性があり、その現状を知ることは中国全体の少数民族の民族教育の今後を知るために必要だからである。

内モンゴルにおける学校統合政策は、2001 年 6 月 17 日の「国務院の基礎教育改革及び発展に関する決定」と 2002 年 5 月 15 日の「内モンゴル自治区の小学校・初級中学校の配置調整に関する決定」に端を発する。この政策の主な目的は、教育資源の科学的かつ合理的な配置、教育の質の確保、そして、学校運営の効率化とコストの削減などである（ハスゲレル 2016：12）。2006 年に施行された「中華人民共和国義務教育法」において、「県級の人民政府は地域毎に寄宿制学校を設立し、居住分散地域の適齢児童・少年を入学させ、義務教育を保障する」と規定されていた。従って、寄宿制学校は中国少数民族地域の特性に合わせた、法的に保障された学校制度となった。

中国内モンゴル自治区では、改革開放政策、市場経済化、西部大開発など経済体制や政策の変化によって少数民族教育が大きく変化している。内モンゴル自治区『教育成就 1947－1997』によれば、1979 年には学校数が小学校 4,387 校、中学校 501 校であったが、2014 年は小学 2,761 校、中学校 160 校に減少しているのが現状である。また、これらの一連の経済開発に伴い、都市化政策及び急速な漢族との交流の深まりの中で民族言語の使用範囲が狭小化している。

本論文では、中国内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗のバヤンウンドゥルソムの小・中民族学校を対象としている。言語教育だけでなく、「活動」「朗読」「歴史」などの授業を参与観察していることが本論文の特色である。さらに、牧畜地域、農耕地域、都市部という 3 つの地域が混在する赤峰市をフィールドとして、民族学校を比較し、学校統合に伴う影響

を分析した。その分析は聞き取り調査だけでなく、学校での授業や活動の参与観察も行っている。聞き取り調査についても、教育関係者や地域の保護者だけでなく、寄宿舎生活を行っている生徒の聞き取り調査を行い、言語生活だけでなく、伝統文化体験など、民族生活の全体に迫っているところに意義がある。

本論文の目的は、第一に、学校統合に伴った民族教育の実態と変化を現地調査に基づき民族誌的に記述して、引用できるものとして提示すること、第二に、学校教育において行われている民族教育がどのような状況に置かれているか、その民族教育が民族的マイノリティの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育であるかを明らかにし、当該少数民族としての民族意識と民族文化の変化にどのような影響を与えているかを実証できるようにすること、第三に、多民族国家における少数民族文化の変容に新たな知見を提示することである。

## 第2節 先行研究

グローバリゼーションの進行に伴い、人々の移動が活発化してきたことにより、民族、宗教、言語、文化の相違による対立・紛争がますます激化してきている。21世紀に、人類が平和に共存するためには、異文化理解、国際理解を一層推進することによって、言語、文化を異にする諸民族が相互に違いを認め、人権を尊重する多文化共生社会の現実を目指すことが求められている（ソロンガ 2006：205）。そのため 1970 年代以降、多くの多民族国家において、新たな社会統合の理念として多文化主義が提唱されてきた。

中国は漢族と 55 の少数民族から構成される「統一された多民族国家」である。多数の少数民族を含んでいる中国の教育において、多文化共生への教育をいかに実現していくかが大きな課題であると考ええる。

中国は「民族平等」という理念を掲げている。その「民族平等」とは、第一少数民族の社会参加に関する権利の平等と少数民族文化の言語、文字・習慣・宗教信仰の尊重も包含している（張 2007：212）つまり、「民族平等」とは、権利の平等という意味だけではなく、各民族文化の尊重と共生という意味をも含んでいる。しかし、中国は現在、漢民族が圧倒的多数を占めるため、少数民族の文化が必ずしも尊重されているとは言えず、各民族文化の共生までには至っていないのが現実である（ソロンガ 2006）。

多文化共生の視点からみた研究の始まりは 1980 年代末に費孝通が、香港の中文大学で行った講演で「中華民族多元一体」と発表したことである。中国に住んでいる各民族全体をひとつの大きな民族であると主張し、その中の 56 個の諸民族を「多元」、中華民族を「一体」として捉えている（費 1989：1）。

多文化教育・二言語教育に関する先行研究は、政治制・制度に関する記述的研究と教育理念・教育方法・教育内容などに関する理論的・実践的研究が中心で、多元文化教育・二言語教育のメカニズムと機能や民族共生と社会統合の実現への寄与を扱った実証研究は極めて

少ないと指摘する研究者もいる（張 2007：2）。

これまでの中国の少数民族教育に関する研究では、民族教育の衰退の原因、民族学校数と生徒数の減少の要因について指摘するものが多い（スチンテクス 2013）。その多くは、中国の少数民族教育政策に焦点を当てている。内モンゴル自治区のモンゴル民族の教育現場で実際に行っている教育について分析したものはほとんどない。現実の教育がどのぐらい（量的に）発展してきたのか、そこで発展を阻害しているのは何かといった点を指摘しているだけである。しかし、少数民族教育の目的と照らし合わせた場合、その拡大の裏で何が失われているのか、また何を見落としているのかを詳細に検討する必要があると考える。

内モンゴル自治区のモンゴル民族の教育の現状とその抱える問題点を課題にした研究はごく最近、注目され、行われるようになった。代表的な論文を取り上げ、その特徴と残された課題について述べる。

岡本（2008：4）は、「しかし中国の場合、法律はこう定めている、政策はこうなっている、民族学校は何校あり……といった政府の公的立場やハード面の情報は、対外的にも積極的に流れる一方で、ソフト面の状況—現状での実施状況や具体的な反映、成果、当事者たちの思いなど—は、不思議なほど伝わってこない」と指摘し、中国の少数民族学校に対する政策について、中国の少数民族教育の実情と全体像を体系的に描いている。牧畜地域、牧畜民という視点からの言及は少ない。

ハスゲレル（2005）は、「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題—教科書分析を中心に—」において、モンゴル民族小中学校で使用されている母語（モンゴル語）と歴史の教科書を分析し、教育内容のあり方を検討した。文化史、民族史の内容が少ないことが影響していることを課題とした。しかし、民族の意識の育成について論じるには、全国共通科目である「課外活動」という科目の内容を加える必要があると考える。その内容はすべてが民族文化教育として位置付けられているわけではないが、この「課外活動」では、内容は各学校自身でアレンジでき、担当する教諭がその内容を決めた教科書を使うことができる。この「課外活動」には、特定の教科書はなく、一つの活動として行われている。ハスゲレル（2005）では、この「課外活動」については触れていないという課題が残っている。

鳥力更（2013b）は、「中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究」において、「内モンゴル自治区の寄宿制民族学校教育に焦点を当て、中央政府の政策下にある少数民族学校教育の持つ内在的要因を分析し、その教育という要素が少数民族の次世代のアイデンティティの確立を阻害しているのかを明らかにすることを課題にした。でも、寄宿生民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などについて触れてないという課題が残されている。

ムンクバト（2014）は、内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育をテーマとした日本の大学の博士論文で、モンゴル人のアイデンティティ、二（三）言語政策、教育政策の面から民族教育が研究され、研究の広がりが見られるが、やはり牧畜地域の研究が少ないと指摘する。そこで、ムンクバト（2014）は、内モンゴルの牧畜地域、特にシリンゴルにおける民族



学校の状況を明らかにした。また、牧畜民の生活環境、言語教育、文字使用について詳細に分析した。彼は、西ウジムチンにおける民族学校の統廃合についても触れている。寄宿制民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などについて触れていないという課題が残されている。

中国の少数民族教育の現状とその抱える問題点を多文化共生の視点からみた代表的な論文を取り上げ、その特徴と残された課題について述べる。

ハス額爾敦(2005)は、「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題：内モンゴル自治区の民族教育を中心に」において、「特別な優遇政策」により、少数民族教育事業がどのような発展を遂げたのかを分析し、「優遇政策」を通して、民族学校の数や各級の在学学生数などの増加という「少数民族教育はハード面での発展を遂げている」が、少数民族出身の人々が自民族の言語・文字によって学校教育を受ける人数割合の減少という「少数民族言語・文字による教育が衰退に陥り、民族伝統文化の教育が厳しい状況に直面するという矛盾が生じている」ことを指摘した。しかしながら、民族学校統合に伴う寄宿制学校について論じることはなかった。

ソロンガ(2006)は、「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状—都市部のモンゴル家族の生活実態を中心に—」において、「モンゴル族の家族が現実にはどのような状況になるのか」という視点から民族教育の現状を分析し、都市部におけるモンゴル族の家族の生活実態として、民族語による学校教育が急速に減少している現状とそれによる親子間のコミュニケーションや民族アイデンティティへの影響を明らかにしている。内モンゴル自治区における民族教育の現状を論じるには、都市部、牧畜地域、農耕地域において大きな格差が隠れている。ソロンガは、都市部の民族教育の現状を、都市部のモンゴル民族の生活実態を中心に現地調査を行っているが、牧畜地域と農耕地域のモンゴル民族教育の現状の把握までには及ばなかった。

張(2007)は、「中国における多文化教育のメカニズムと機能に関する研究：一民族共生と社会統合の視点から—」において、具体的に分析課題として、中国における55の少数民族が二言語教育政策にどのような対応をしているか、少数民族の出身の生徒の進路選択と進路意識は何によって規定されているか、二言語教育は民族アイデンティティの形成、ナショナル・アイデンティティの形成、多民族文化の理解や多民族との協調意識の形成に、どのような動きをしているか、といった問題を設定して、二言語教育に焦点を当て、その政治制度・メカニズム・機能について、民族共生と社会統合の視点から実証的に分析しようとした。しかし、その二言語教育に焦点を当て、民族教育の最も重要な民族歴史の学習、民族伝統文化の継承という分野に触れていないという課題が残されている。

そこで、本研究は、中国内モンゴル自治区における学校統合にどのような対応がされているか、少数民族出身の生徒とその保護者、教諭などがどのような意識を持っているかに注目し、学校統合に伴う民族教育の変化と影響について、①モンゴル語能力の低下、②モンゴル民族の歴史を学習する機会の喪失、③民族文化の伝統行事への参加の減少、④日常生活にお

けるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失、⑤モンゴル民族文化を体現していた教諭の減少という 5 点に焦点を当て、その抱える問題点を多文化共生の視点から客観的に分析する。

### 第3節 研究方法と構成

本論文は、中国内モンゴル自治区における学校統合政策に伴い、民族教育<sup>1</sup>がどのように変容したかを現地調査に基づいて明らかにし、学校統合政策が民族教育に対してもたらした影響について考察することを目的としている。

そのため、本論文では、現地調査、事例の分析、インタビューと雑談、文献資料の分析などの研究方法を中心にしている。

まず、都市部における民族教育現場、牧畜地域における民族教育現場、農耕地域における民族教育現場という三つの民族教育現場に分類し、それぞれの民族教育現場で参与観察を中心とした現地調査を行った。筆者は、調査対象地域である内モンゴル自治区赤峰市で、2010 年から 2016 年にかけて、断続的現地調査を実施した。具体的には、以下の通りである。

第一回：2010 年 3 月 8 日～4 月 8 日にかけて、赤峰市アルホルチン旗バヤンウンドゥルソムに位置するバヤンウンドゥル中学校で現地調査を行った。

第二回：2012 年 9 月 3 日～9 月 28 日にかけて、赤峰市都市部における赤峰市民族中学校で現地調査を行った。

第三回：2014 年 3 月 1 日～4 月 1 日にかけて、赤峰市アルホルチン旗バヤンウンドゥルソムに位置するバヤンウンドゥル小学校で現地調査を行った。

第四回：2014 年 6 月 3 日～7 月 6 日にかけて、赤峰市モンゴル実験小学校で現地調査を行った。

第五回：2015 年 6 月 15 日～7 月 5 日にかけて、赤峰市アルホルチン旗チャブガバラガスに位置するチャブガ第五中学校と赤峰市オーハン旗のオロインスムモンゴル民族中心小学校で現地調査を行った。

赤峰市における現地調査の詳細は第五章、第六章、第七章で詳述する。

次に、文献資料の分析である。主に、中国の 50 年代以降の公表された中国少数民族教育政策と具体的な教育カリキュラムを整理、分析した。中国少数民族教育に関する国務院決定、少数民族教育に関する政策文書、少数民族教育に関する報告書などを収集した。内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の発展してきた根拠を提示するために、モンゴル民族教育の歴史の発展を調べる必要がある。そのためには、『モンゴルの秘史』、『蒙古学百科全书 教育編』などの歴史資料や、先にあげた中国少数民族教育に関する国務院決定、少数民族教育に関する政策文書、少数民族教育に関する報告書などの資料を使用した。さらには、実際に教育関係者、教育現場の経験者、保護者、生徒などへのインタビューにより一次資料を入手することを重視した。

筆者はこれまで、2010年から2015年まで断続的に4回にわたり、内モンゴル自治区赤峰市の学校統合後の民族学校で調査を行ったが、こういった内モンゴル自治区赤峰市の学校統合後の民族学校を対象にした調査の例もなく、これらの調査を行ったことにより、学校統合に伴った民族教育の変化を明らかにすることができた。そこで得られた調査結果は、本研究を特色づけるものとして重きをなすものである。

中国の教育制度は、大きく就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育と成人教育から成り立っている。就学前教育は、幼稚園又は小学校付設の幼児学級で、通常3～6歳の幼児を対象として行われる。初等教育は、6年制である。義務教育法（1986）には入学年齢は6歳と規定されており、7歳で入学の地域が多い（『教育指標の国際比較』22年度：75）。中等教育である中学校は、3年制である。初等教育と中等教育を義務教育とした。1986年の義務教育法の成立より、中国では9年制の義務教育が実施された。高等教育は3年制で、大学は4年制となっている。本論文では、初等教育と中等教育に注目した。その理由は、初等教育と中等教育は、学校統合に伴う最も激しい変化の中にあり、教育の質の確保をするためにその変化を明らかにすることが必要とされているからである。

以下に、本論文の構成を示す。

第一章では、本論文の研究背景と目的、研究方法と構成を示している。

第二章では、モンゴル伝統教育の歴史を『蒙古学百科全書 教育編』に沿って、モンゴル地域における家庭教育と寺院教育の内容の特徴を概観し、検討を加える。

第三章では、内モンゴルにおける民族教育の現状について論じる。

第四章では、本論文の現地調査対象地域である赤峰市の概要、民族教育の歴史を紹介し、赤峰市を選択した理由について述べる。

第五章では、赤峰市の牧畜地域の対象学校であるバヤンウンドゥル中学校とチャブガ第五民族中学校の事例を取り上げる。

第六章では、赤峰市の都市部の対象学校である赤峰市モンゴル民族中学校の事例を取り上げる。

第七章では、赤峰市の農耕地域の対象学校であるオロインスムモンゴル民族中心小学校の事例を取り上げる。

第八章は、本論文の総合的考察と結論である。

なお、本論文での地図、図、表などは、引用資料をそのまま使ったものもあれば、引用資料に基づき筆者が作成したものもある。また、現地調査はすべてモンゴル語を用いて行い、必要に応じて、中国語も用いた。モンゴル語、中国語の引用文献の日本語への翻訳は筆者によるものである。

## 第二章 モンゴル伝統教育の歴史

どのような民族の教育もその民族の文化、生活習慣と密接な関係がある。モンゴル伝統教育もその通りである。『モンゴルの秘史』によれば、「1204 年にチンギスハンが、ナイマンのタタトンガに、ハンの兄弟、次世代にウイグルモンゴル語を教える命令をした」と記載している（阿拉塔 2011）。これはモンゴル人の教育についての文字のはっきりしたノートである。これによれば、チンギスハンは、モンゴル民族教育の基礎を作った人物である。モンゴル地域に学校教育の基礎が作られたのは 13 世紀以降のことであると言われている。

中華人民共和国成立前のモンゴル民族の教育システムは、家庭教育、寺院教育、政府教育の三つの教育方式で形成されていた。すなわち、モンゴル民族の教育システムは、家庭教育、寺院教育、学校教育という形式で構成されていたのである（阿拉塔 2011）。

### 第 1 節 家庭教育

13 世紀以前のモンゴル族の教育は、主に家庭という場を中心に行われていた。以下、『蒙古学百科全書 教育編』に沿って、モンゴル地域における家庭教育と寺院教育の内容の特徴を概観し、検討を加える。

家庭教育の内容を『蒙古学百科全書 教育編』では、以下の 3 点にまとめている。

第一に、品德教育。老人を尊敬し、幼を愛し、同前でおとなしい、言行一致。勤儉であることを重視し、浪費することに反対していた。品德教育をすると同時に、社会行為範囲と民俗教育も重視していた。社会行為範囲には、例えば、大自然を保護し、樹木を勝手に破壊しないことと動物を保護すること。民俗教育には、例えば、モンゴルゲルの門の上を踏んではいけないなどのタブーがある。大人たちは、自分で次世代の手本になって教育をしていた。

第二に、知力開発の教育。モンゴル人は、民謡とウリゲル（物語）を通じて子供たちの知力開発をしていた。例えば、モンゴル民族の物語の中、バラガンさんのウリゲルは人気がある。

第三に、子供の労働能力を養う。生産労働の中、子供の生活技能と良好品質を高める。子供たちが早めに労働に参加する。男子は主に家畜の世話をする。女子は家事の手伝いをする。

この家庭教育で述べた 3 点からは、まず、古代のモンゴル社会においては、家庭教育が主な教育形式であったことが分かる。家庭教育の内容の特徴としては、品德教育を一番大事にしていたことがわかる。品德教育で重視したのは、親の身体、精神の健康である。それと同時に、社会行為範囲と民俗教育も重視していた。社会行為範囲で重視したのは、大自然を保護し、樹木を勝手に破壊しないことと動物を保護するという自然環境を守る教育をしていたことが分かる。民族教育で重視したのは、モンゴルゲルの門の上を踏んではいけないなどのタブーについてである。大人たちは、自分で次世代の手本になって教育をしていた。

次に、家庭教育の内容の特徴としては、知力開発の教育をしていた。モンゴル民族の伝統

文化である民謡、ウリゲル（物語）を通じて子供たちの知力開発をしていた。たとえば、バラガンさんのウリゲルは人気がある。牧畜地域では、現在もこのウリゲル（物語）を通して、子供の知力開発教育をする老人が大勢いる。

最後に、家庭教育の内容の特徴として、子供の労働能力を養うことである。生産労働の中子供の生活技能と良好品質を高める。古代のモンゴルの家庭教育は、子供から一人前の大人になるまで家庭教育が重要な役割を果たしていたことが分かる。

## 第2節 寺院教育

モンゴル地域における寺院教育は新中国の成立に伴い、学校教育現場としての機能が失われていった。特に文化大革命時代に、寺院自体の数と僧侶の数も減り、子供たちが学校教育である義務教育を受けるようになった。しかし、家庭教育と寺院教育によるモンゴル民族の文化・言語の伝承への貢献は学校教育による貢献とは比べものにならないほど重要な位置にあったと言われている（阿拉塔 2011）。

『蒙古学百科全書 教育編 207』は、寺院教育の内容を以下のようにまとめている。

モンゴル人が初めて、チベット仏教に接触したのは、13 世紀のモンゴル帝国時代であると言われている。チベット仏教がモンゴル地域に浸透したのは 16 世紀である。アラタンハン時代に 200 年中断した仏教が再びモンゴル地域に浸透した。

清朝時代には、内モンゴル各旗には、1,800 あまりの寺、15 万人以上の僧侶があり、その数はモンゴルの男子の 40～50% を占めていたという（阿拉塔 2011：22）。

1936 年の民国蒙政府の統計によると、当時、東北のモンゴル地域に 662 の寺院とラマは 28,985 人もいた。新中国設立した初期は内モンゴル自治区の牧畜地域の非識字者が 50% であったのに対し農耕地域の漢民族は 95% 以上だったという（『蒙古学百科全書 教育編』）。

モンゴル民族は元代までは仏教を推奨していた。仏教寺院はモンゴル民族教育の発展に促進作用をしたと評価が高い。内容として以下のように 4 点にまとめている。

第一に、モンゴル文字を学んでいた。僧侶たちは、最初にチベット文字を学ぶものが多い。後に寺院でモンゴル文字を学んでいた。僧侶たちの仕事は一般職から高級段階まで分かれて、梵語も学んでいた。試験に合格すれば、専門を選べ、継続して勉強できたという。

第二に、科学知識を伝授していた。僧侶多い寺院には、径学部、医学部、天文学部などがあった。

第三に、翻訳人材を育てた。モンゴル族寺院とチベット族寺院においてのモンゴル人僧侶の数多くは、モンゴル語、チベット語、梵語に堪能であった。

第四に、印刷技術が活用されていた。モンゴル族寺院は大量のモンゴル経典とほかのモンゴル書籍を彫刻するか印刷していた。これがモンゴル文字の経典の伝播、保存と利用などのモンゴル民族文化教育の発展に不可欠であった。

この寺院教育で述べた歴史背景から見れば、チベット仏教は、モンゴル地域の伝統文化の

重要な部分であったことが分かる。清朝時代には、内モンゴル各旗には、1,800 あまりの寺、15 万人以上の僧侶がおり、その数はモンゴルの男子の 40～50%を占めていたということから、モンゴル地域におけるチベット仏教が広い範囲で普及していたこととモンゴル民族の伝統文化、教育への影響の大きさを想像できる。

寺院教育の教育内容からみれば、モンゴル文字などの言語教育、科学知識の伝授、翻訳人材の育成、印刷技術の活用などから、寺院教育がモンゴル仏教文化、モンゴル文化の宣伝・学習に貢献しただけではなく、文化遺産の保存・伝承に貢献したことが分かる。

### 第 3 節 学校教育

1902 年に、ジョスト盟ハラチン右旗で、グンセンノロブがモンゴル社会での初めての近代式学校とされる崇正学堂を開いた。グンセンノロブは崇正学堂に続き、モンゴル初の女子学校と軍事学校をつくっている（岡本 2008：192）。1900 年に義和団の事件が起こり、北京が八カ国連合軍に蹂躪されると清朝政府は本格的な教育改革に乗り出し、1902 年に「欽定学堂章程」、1904 年に「奏定学堂章程」を廃し、科举制度と官学を廃止、大日本帝国をモデルにした新式の学校制度の導入を図った。グンセンノロブの教育事業は、この清朝末期の教育改革に呼応したものだと言われる。このように、モンゴル人の近代教育が、中国の中央政権とのつながりの中で始まったがモンゴル人の手によるモンゴル民族の近代教育の始まりであると岡本氏は指摘している。

崇正学堂の授業内容は、言語としてモンゴル語、漢語、後には日本語などの外国語も教えていたという。地理と歴史は、グンセンノロブが編さんさせた「ハラチン源流要略便蒙」を教科書として、モンゴル諸旗の地理や歴史を教えていた。教師は、最初モンゴル人と漢人を、後には日本人の教師も雇っている。崇正学堂は、宿舍、食堂、図書館も備え、モンゴル語の新聞も発行し、またグンセンノロブは、モンゴル文字で書かれた教材を作るため、モンゴル語の印刷館も立てたという（岡本 2008：192）。グンセンノロブの学校は子供を貧富の差なく受け入れ、食費、服装、教科書、文具などはすべて無料にした。1912 年までに、学堂の卒業生は 600 人にのぼり、テムゲトなどの人材がその中から輩出したという。このように、グンセンノロブが創設した学堂教育はモンゴル民族文化の復興を図った教育として評価が高い。その後、多くの地域に学堂教育が展開したがその広がりや、偏りがあり、主に、東北地域と赤峰市であった。東北地は漢語、赤峰市はモンゴル語と漢語を重視していたという。そして、その他の地域のホロンバイル盟、ヒンガン盟、ウランチャブ盟、バヤンノイル盟、アラシャン盟では学堂教育が空白の状況にあった（阿拉塔 2011：22）。そのため、この地域で寺院教育が続き、モンゴル語とチベット語が教えられることになった。

上述した学校教育についての歴史から、モンゴル地域に学校教育が始まった時期にも、寺院教育がモンゴル民族の教育に重要な役割を果たし、モンゴル民族の教育発展にもたらした成果は大きいことが分かる。

### 第三章 内モンゴルにおける民族教育の現状

#### 第1節 中国と内モンゴル地域の学校統合の基本状況

学校統合政策は、2001年6月17日の「国务院の基礎教育改革及び発展に関する決定」と2002年の5月15日の「内モンゴル自治区の小学校・初級中学校の配置調整に関する決定」に端を発する。この政策の主な目的は、教育資源の科学的かつ合理的な配置、教育の質の確保、そして、学校運営の効率化とコストの削減などである（ハスゲレル 2016：12）。2006年に施行された「中華人民共和国義務教育法」において、「県級の人民政府は地域毎に寄宿制学校を設立し、居住分散地域の適齢児童・少年を入学させ、義務教育を保障する」と規定され、寄宿制学校は中国少数民族地域の特性に合わせた、法律的に保障された学校制度となった（烏力更 2013：132）。この学校統合の実施に伴い以下のような問題が起きた。

まず、全国的に就学前の子供の数が減り（図1）、それに従い生徒数の減少が起きた。これが、80年代から始まった計画生育政策の影響であると考えられる。例えば、2005年になると就学前の子供の数が2000年に比べて全国で2.65%減り、内モンゴルで4.18%減った。

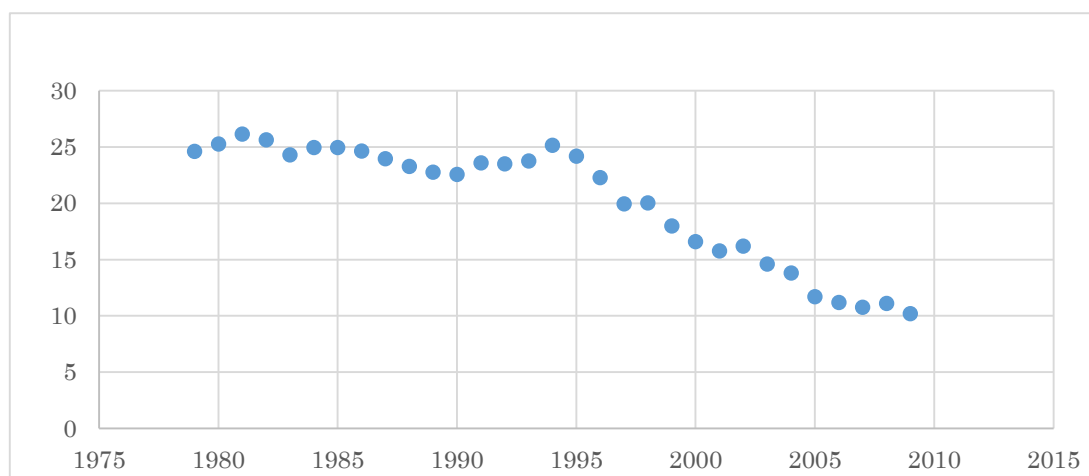


図1 モンゴル語で授業を受ける生徒数の変化

（出典：赤峰市教育局（2009）に基づき、筆者作成。）

次に、2001年から実施しはじめた地域の税金の改革で教育への投資は主に増税、募金などに頼っていたのを停止させたことは、バラガス鎮の財政の負担になった。このような状況で各学校を廃校し、統合させ、予算を削減した。そのため、2001年～2004年までの4年間で、全国の小学校3万1,700校を統廃合させた。内モンゴル自治区では、2001年～2006年の間で、中学校と小学校を合わせて8,039校を廃校させた。その結果、小学校は4,428校となり、前より47.5%減り、中学校は465校となり27.9%減り、小学校の教育地<sup>2</sup>は3,146校

となり 68.4%減った（ハス額爾敦 2017：209）。図 2 は内モンゴル自治区における 1958 年～1997 年の間のモンゴル民族中学校の数の変化のグラフである。図 2 をみると、1958 年には、モンゴル民族の中学校の数はわずかであったが、1970 年まで少しずつ増えている。1971 年には大きく変化があり、1975 年までに急激に増え、1976 年に一番多くなっている。そして 1977 年から再び減少している。筆者が調査を実施した赤峰市アルホルチン旗では、11 のソムごとに設置されていた計 13 校の民族中学校はすべて廃校となり、それが旗の中心部に置かれた民族中学校の 2 校に統合され、周辺のソムから生徒が集まる寄宿制民族学校になった。

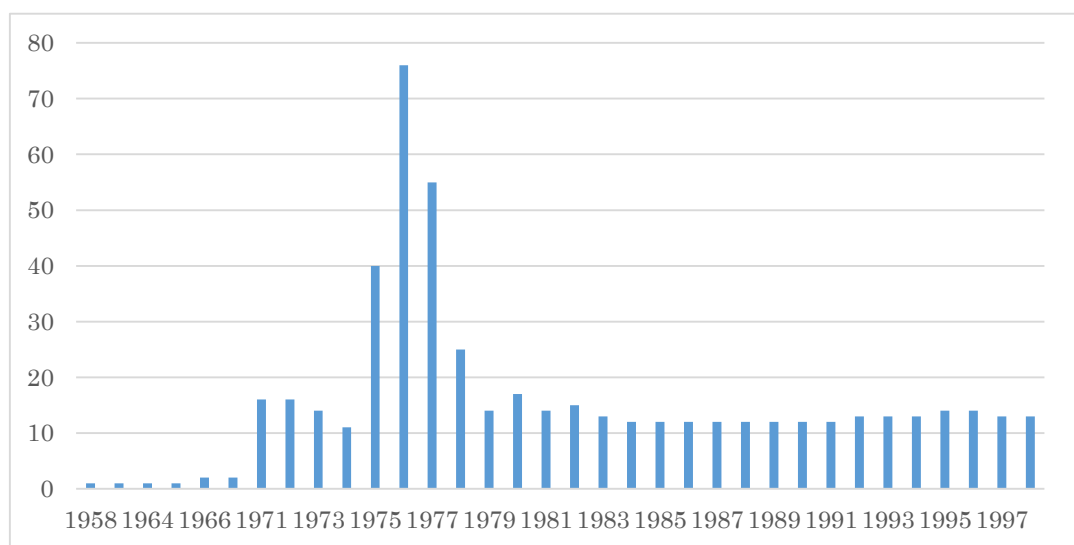


図 2 内モンゴル自治区における 1958 年～1997 年の民族中学校の数  
（出典：岡本（2008：221）に基づき筆者作成。）

## 第2節 内モンゴルにおける民族教育の歩み

中国の少数民族政策と少数民族教育政策の歴史的な経緯については次のような時期区分がなされている（格日樂 2007:65）。

- ①1949 年～1957 年の少数民族政策に安定した政策が取られた安定期
- ②1958 年～1963 年の百家争鳴から反右派闘争への急転換、地方民族主義への攻撃、民族融合論に急進した急進期
- ③1964 年～1977 年の文化大革命による民族文化の破壊など、過酷な政策が取られた階級闘争期
- ④1979 年～1990 年までの改革開放政策により民族政策と民族教育政策が回復した時期。

以下、中国成立以降の内モンゴル自治区における民族教育の歩みを、格日樂（2007）の整理をもとにたどる。内モンゴル自治区における民族教育の歩みは民族教育の発展と成果により、以下の四つの段階に分けることができるという（格日樂 2007）。



#### ①新中国初期の旧中国教育制度に対する改革（1949年～1956年）

新中国成立後は、旧国民党統治区の教育が引き継がれ、社会主義改造が開始される。政府は知識分子の団結を決定する一方、彼らに対し社会主義教育を施し、改造を求めたのである。

1951年9月北京で第一回全国民族教育会議が開かれ、民族教育についても「中国人民政治協商会議共同綱領」（1949年9月中国人民政治協商会議第一回全体会議通過）による新民主主義教育の方針を貫徹する意思が固められた。教育の社会主義的な改造を前提に、「教育の内容を各少数民族の実態に結び付けて推進すべき」、という民族教育の基本方針を確立したのである。

#### ②社会主義教育発展への模索（1957年～1965年）

この時期に、教育領域における反右派闘争が始まる。そして、1958年前後に民族教育の社会主義的改造が完了したことが宣言されるとともに、民族教育が初めて、大きな危機に直面した。民族教育に対する「条件論」、「特殊論」が全面的に否定され、「共同性」と「民族融合」を強調し、民族の差異を無視したのである。多数の民族学校が普通の学校と合併し、政府内の民族教育行政部門が廃棄された例も珍しくなかった。しかし、1962年教育事業の調整が始まり、民族教育において犯した「過ち」がようやく是正され、民族教育が一定程度の発展を遂げた。

#### ③文化大革命のなかの教育（1966年～1976年）

文化大革命が始まると中国全体の教育制度が覆されることとなった。そして、その破壊が民族教育にも及んだ。教育関連部門と「四人組」との闘争が始まり、「四人組」によって「民族問題は階級問題である」とみなされ、民族教育が圧殺された。これにより、民族の差異が再び否定され、少数民族の民族特徴が無視されることとなったのである。そして、ほとんどの民族学校が経営停止状態へと追い込まれていった。

#### ④改革開放初期における教育事業の改革と発展（1977年～1992年）

この時期には、文化大革命による民族教育に対する「過ち」が是正された。民族教育を含む教育全体の戦略的な地位を確立することが提起されたのである。文化大革命の終了後に、鄧小平は、「科学技術は生産力である」と発表し、国を挙げた教育改革に力を入れた。「中華人民共和国義務教育法」（1986年4月）「中華人民共和国義務教育法実施細則」（1992年3月）等を制定し、民族教育においても中国教育制度の一部として教育改革の全面展開、道德教育の強化と改善、外国に対する開放などが進み、国務院が「中国教育改革と発展綱要」を発表し、教育改革のこれまでの成果を総括し、発展の方向を固めた。

### 第3節 内モンゴル自治区における民族教育の現状

#### 3.3.1 学校教育における「二言語・三言語教育政策」の展開

中国の学校教育における「二言語・三言語教育政策」が行われている。二言語とは、母語

と漢語である。つまりモンゴル民族においては、母語モンゴル語と漢語である。チベット族ならば母語チベット語と漢語である。「三言語（母語・漢語・外国語）教育政策」というのは、二言語の上に外国語として英語を学ぶことである。モンゴル民族ならば母語モンゴル語、漢語、英語を学び、チベット族ならば母語チベット語、漢語、英語を学ぶ。「二言語教育政策」・「三言語教育政策」の展開は以下のようである。

1902 年、モンゴルにおける最初の近代学校「崇正学堂」が創設された。そこでは創立当初から、社会変容に適応するために多言語教育が実施されていた。1957 年になると、内モンゴル教育庁は漢語授業の導入について「民族学校の中で愛国主義教育を徹底し、先進民族の文化を吸収し、民族の言語を豊かにするために、自治区の民族学校はすべて漢語の授業を加える」ことになった（『日本学習社会年報 第3号』：58）。

これが二言語政策の始まりである。1950 年代に、「双語教育政策」が始まり、1951 年の全国第 1 回民族教育会議において、少数民族の言語・文字政策と少数民族地域における漢語教育について基準が定められた。内モンゴル自治区教育委員会は、民族教育のレベルを社会変化に合わせるために、民族中学校では、1999 年秋季より中学校 1 年生から「三言語（モンゴル語・漢語・外国語）教育」が開始された。2001 年の秋学期からは民族学校の小学 3 年生から「三言語教育」が始まった。現在は、内モンゴルの各モンゴル民族学校で統一カリキュラムが実施されている（表 1、表 2）。

表 1 バヤンウンドゥル中学校一年生の時間割

（出典：バヤンウンドゥル中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。）

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	8:00～8:40	モンゴル語	数学	漢語	数学	モンゴル語
2 限	8:50～9:30	数学	漢語	数学	モンゴル語	英語
3 限	10:15～10:55	地理	音楽	英語	英語	漢語
4 限	11:05～11:45	英語	モンゴル語	政治	体育	数学
5 限	14:20～15:00	体育	英語	生物	歴史	政治
6 限	15:15～15:50	漢語	歴史	モンゴル語	漢語	モンゴル語
7 限	16:05～16:45	生物	美術	数学	地理	情報
8 限	16:55～17:35	活動	朗読	活動	朗読	会議

表 1 と表 2 に示すように、中学 1 年生の授業はモンゴル語と中国語、数学、英語、地理、体育、生物、音楽、歴史、美術、政治、情報の 12 科目ある。モンゴル語、漢語、数学、英語は毎日 1 時間で、週に 5 時間である。その他、地理と体育、生物と歴史、政治の科目は週に 2 時間で、音楽と美術、情報が週に 1 時間である。そのほか 8 限は「活動」が 2 時間と「朗読」が 2 時間となっている。

モンゴルの民族文化に関する科目としてはまず「モンゴル語」がある。「漢語」と「英語」

は同様に毎週 5 時間である。歴史に関しては「中国史」と「世界史」の内容が中心で、モンゴルの歴史はわずかである。例えば、教科書は 6 冊あって、中国史は 4 冊、世界史は 2 冊で、モンゴル史はない。中国史 4 冊は合計 763 ページもあるが、その内に、モンゴルに関する内容はわずか 6 ページである。世界史は 2 冊で、400 ページの内にモンゴルに関する内容はほとんどない<sup>3</sup>。しかし、教科書はいずれもモンゴル語で書かれたものである。統合前後の二つの学校の時間割を比較してみると、時間数に変化はなかったことが分かる。

表 2 チャブガ第五民族中学校一年生の時間割

(出典：チャブガ第五民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者記。)

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	8:00～8:40	モンゴル語	漢語	漢語	数学	数学
2 限	8:50～9:30	数学	モンゴル語	地理	モンゴル語	英語
3 限	10:15～10:55	英語	英語	歴史	政治	漢語
4 限	11:05～11:45	体育	数学	英語	数学	モンゴル語
5 限	14:20～15:00	漢語	政治	体育	英語	生物
6 限	15:15～15:50	地理	情報	数学	モンゴル語	歴史
7 限	16:05～16:45	音楽	生物	モンゴル語	漢語	美術
8 限	16:55～17:35	活動	朗読	活動	朗読	会議

### 3.3.2 少数民族教育政策の内容

少数民族教育政策の内容は、主に「民族平等」を基礎にした民族教育政策と少数民族を対象にした優遇政策と特別措置である。

1949 年の内モンゴル自治区第一回教育事業会議で、「少数民族の言語と文字を発展させ、少数民族学校では、自民族の言語と文字で授業をする」という方針が明確にされている(韓 1998:103)。

1951 年の第一回中国における全国民族教育会議で作成された「内モンゴル自治区小学校教育暫定実施方法」第 11 条には、初等教育 1・2 年の生徒に対しては、モンゴル族学校はモンゴル語で、漢語学校は漢語で授業を受けることを明確に指定されている。また、第 12 条には、「モンゴル族小学校は、原則として二種類の文字は学習しない、必要があれば高学年に入ってから学習する」と指示されている(韓 1998:104)。

1952 年 8 月 9 日、中央政権の「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」により、民族区域を「不可分の一部」と制定した上で、各民族自治区機関の役割は、自民族の言語・文字の使用と自民族の文化・教育事業の発展及び民族幹部の養成などに限定された(韓 1998:109)。

1954 年 9 月に制定された「中華人民共和国憲法」第 3 条は、次のような民族問題に関する基本原則を定め、中国の少数民族政策の在り方を示した。各民族の平等、団結、国民統合、

国家統一の維持、促進は民族区域自治の最重要課題である。中国では少数民族問題に触れる際に、中国各少数民族は「中華民族」の一員であり、「漢民族は少数民族から離れられない、少数民族は漢民族から離れられない」という表現が頻繁に用いられる。「中華民族多元一体」論は中国民族理論の核心をなしている。この「中華民族多元一体」論によれば、少数民族は次元の異なる「複合的アイデンティティ」をもつ。「複合的アイデンティティ」とは、自民族の一体感（帰属意識）とそれより高いレベルの漢民族を中心とする中華民族の一員であるという中華民族の一体感（帰属意識）である（西村 2007：37）。

このように、新中国が成立した当時は、民族語で教育を行うこと、民族の伝統文化を教えることにより、民族的アイデンティティが尊重されていたと言える。

### 3.3.3 学校統合による民族教育の実態

内モンゴル自治区では、2001 年～2006 年の間で、中学校と小学校を合わせて 8,039 校が廃校された。その結果、小学校は 4,428 校で前より 47.5%減り、中学校は 465 校で 27.9%減り、小学校の教育地は 3,146 校で、68.4%減った（ハス額爾敦 2017：210）。図 3 は内モンゴル自治区における 1958 年～1997 年の間のモンゴル民族中学校の数の変化の図である。図 3 をみると、1958 年にモンゴル民族の中学校の数はわずかであったが、1970 年まで少しずつ増加している。1971 年から大きな変化があり、1975 年に急激に増え、1976 年には最多となっている。1977 年からは再び減少している。筆者が調査を実施した赤峰市アルホルチン旗では、11 のソムごとに設置されていた計 13 校の民族中学校はすべて廃校となり、それが旗の中心部に置かれた民族中学校の 2 校に統合され、周辺のソムから生徒が集まる寄宿制民族学校になった。

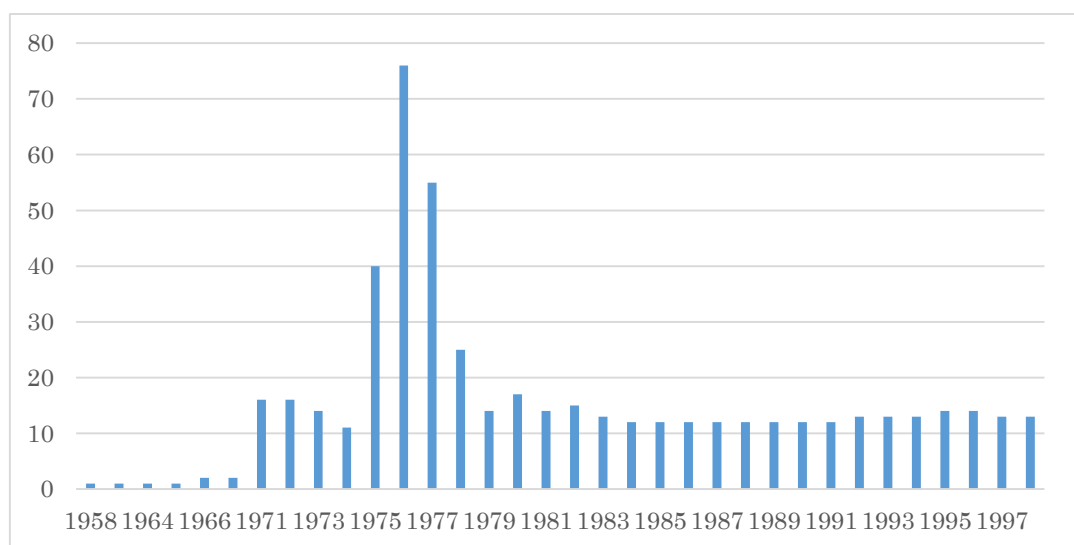


図 3 内モンゴル自治区における 1958 年～1997 年のモンゴル民族中学校の数  
（出典：岡本（2008：221）に基づき筆者作成。）

## 第四章 赤峰市における民族教育の概要

### 第1節 調査地の選択理由

内モンゴル自治区には49の民族、2386万4000人（2005年現在）が居住している（『内モンゴル自治区概況』2009：29）。その内訳は、漢民族が1870万6400人（78.39%）で、モンゴル民族の人口が421万1200人（17.55%）、その他の民族が94万6400人（4.06%）である（『内モンゴル自治区概況』2009：33）。また、内モンゴル自治区には、都市、牧畜地域、農耕地域以外に都市化した鎮（表3）が多くある。

表3 内モンゴル自治区の行政区分  
（出典：阿拉塔（2011）に基づき筆者作成。）

省級行政区	自治区
地級行政区	盟
県級行政区	旗（鎮）
郷級行政区	ソム
村級行政区	ガチャ（村）

調査地の選択理由として以下が挙げられる。第一に、内モンゴル自治区全体の民族割合を代表する地域を選んだ。内モンゴル自治区の民族割合は、漢民族が約78.39%、モンゴル民族が約17.55%である。赤峰市の民族割合は、漢民族が約78.6%、モンゴル民族が約16.8%であり、最も近似している。第二に、内モンゴル自治区全体の混住している人口割合を代表できる地域を選んだ。内モンゴル自治区では、諸民族の交流の長い歴史の中で、複数の民族が様々な形で混住しており、「漢民族の人口が少数民族より多い」、「漢民族と少数民族の人口がほぼ同じ」、「漢民族の人口が少数民族の人口よりも少ない」、という三つの混住パターンがある（溫都日娜 2007：23）。対象地域である赤峰市には、同じように三つの混住パターンがある。第三に、内モンゴル自治区全体の生活と生業形態を代表できる地域を選んだ。赤峰市は、11世紀に遼帝国が建国された地域であり、清朝時代から漢民族が流入し農耕化が比較的早く進み、農耕地域、遊牧地域と、都市、都市化した鎮も多くある。第四に、内モンゴル自治区全体で学校統合の実施状況を代表できる地域を選んだ。内モンゴルの全体を見れば、「都市化が進んだ、交通が便利な地域で、より早く学校統合が行われている地域」もあれば、「交通が不便な牧畜地域で、学校統合が始まったばかりの地域」もある。赤峰市でも都市化が進んだ交通が便利なところで、より早く学校統合が行われているところがある一方、交通が不便な牧畜地域で、学校統合が始まったばかりの地域があるため、この地域を選んだ。このような対象を選ぶことにより、内モンゴル自治区を代表できると期待される。

### 第2節 赤峰市の概要

調査対象地域（図 4）は、中国内モンゴル自治区赤峰市である。内モンゴル自治区の東南に位置し、その面積は約 9 万平方キロメートルであり、その人口は約 460 万人で、内モンゴル自治区で最も人口の多い地域行政区である。その中の約 80 万人がモンゴル民族である。半農半牧の割合の違う地域が広がり、遊牧地域も一部残されている。赤峰市には、三つの区（紅山区、松山区、元宝区）、二つの県（寧城県、林西県）、七つの旗（バイリンバラゴンホシゴ、バイリンジゴンホシゴ、ハラチンホシゴ、ウハンホシゴ、オンニゴドホシゴ、ヘシゲテンホシゴ、アルホルチンホシゴ）がある。全赤峰市には、19 のソム、85 の鎮、28 の郷、2,089 のガチャがある。全市に 1,453 校の学校があり、その内訳は、高校 4 校、専門学校 43 校、小中学校 560 校、幼稚園 846 校ある。

アルホルチン旗は赤峰市の東北に位置し、その面積は、14,277 平方キロメートルであり、11 のソム、245 村がある。その人口は、29.6 万人で、そのうち、モンゴル民族の人口は 11.3 万人、漢民族の人口は 17.6 万人である。チャブガはアルホルチン旗の政治、経済、文化、交通の中心である。バヤンウンドゥルソムはアルホルチン旗の中で唯一遊牧生活を維持している牧畜地域である。そのため、このバヤンウンドゥルとチャブガの二つの地域の学校を選択した。

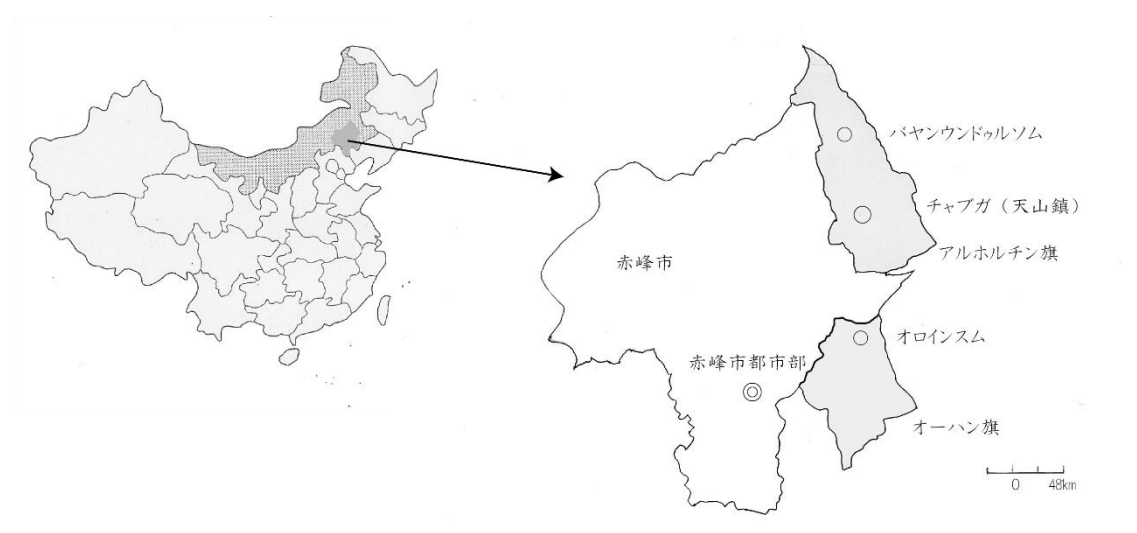


図 4 調査地域

（出典：内蒙古自治区地図（2004）を基に筆者作成。）

#### 4.2.1 行政と住民

現在の赤峰市地帯は新興の清の支配下に入り、1639 年、オンニユート右旗、オンニユート左旗、ナイマン旗（現在、通遼市に属している）、オーハン旗を合わせてジョーオド盟が成立された。1739 年、熱河副都統を設置し、ジョーオド盟はその管轄下に置かれた。1778

年、ジョーオド盟のオランハダ直隸庁が承德府と改名されて赤峰県を管轄していた。それから、赤峰市という名前が定着した。1908 年、赤峰県を赤峰州とした。中華民国時代、現在の赤峰市の領域は 1912 年から蒙蔵事務局、1913 年から熱河特別区（熱河都統）に管轄されていた。同年、赤峰直隸州は赤峰県と改称された。もとの赤峰県は赤峰鎮と改称された。1928 年からは、熱河省に管轄された。満州国時代、依然として赤峰県は、熱河省に管轄されて、現在の赤峰市領域の大半が興安西省に管轄されていた。1946 年にジョーオド盟が復建された。1947 年、内モンゴル自治区政府が成立し、ジョーオド盟は自治政府の管轄となった。1956 年、熱河省が廃止され、ジョーオド盟政府の所在地が赤峰市に移った。1969 年にジョーオド盟は遼寧省に区分された。1979 年、ジョーオド盟は再び内モンゴル自治区に区分された。1983 年、国务院の許可を経て、ジョーオド盟では盟が廃止され、「市管県体制」を実施し、ジョーオド盟という名称を廃止し、赤峰市とした。現在の赤峰市は歴史上の赤峰県、赤峰市、ジョーオド盟の全域を包含する（温都日娜 2007：28）。

#### 4.2.2 赤峰市都市部

紅山区は赤峰市の政治、経済、文化、交通の中心である。紅山区には、2 の旗、27 の村、53 の住宅地がある。人口は 45.6 万で、モンゴル族は 6.4 万人、全人口の 14% を占める。紅山区には各学校は 134 校があり、小学校 38 校、中学校 11 校、普通高校 5 校、ろう学校 1 校、専門学校 7 校、幼稚園 72 校がある（アリゴン 2017：180）。

#### 4.2.3 アルホルチン旗

アルホルチン旗は赤峰市の東北に位置し、その面積は約 14,277 平方キロメートルで、人口は約 30 万人である。その内訳は、モンゴル民族の人口は約 12.6 万人（約 42%）、漢民族の人口は約 17.2 万人（約 57%）である。アルホルチン旗には農耕地域と半農半牧地域、牧畜地域が含まれ、11 のソムと 245 の村がある。チャブガバラガスはアルホルチン旗の政治、経済、文化、交通の中心である。バヤンウンドゥルソムはアルホルチン旗の中で唯一遊牧生活を維持している牧畜地域である。アルホルチン旗には、各種類の学校は 53 校あり、教諭と業務員合わせて 4,240 名、生徒 35,295 名である。そのうち、モンゴル民族学校 23 校、モンゴル民族教諭 1,863 名、モンゴル民族生徒 12,000 名（32.93%）である（アリゴン 2017：162）。

#### 4.2.4 オーハン旗

オーハン旗は、赤峰市の東南部に位置し、その面積は約 8,316 平方キロメートルで、人口は約 60 万人である。その内約 5.5% の 3.3 万人がモンゴル民族である。オーハン旗には、1

のソム、7の鎮、7の郷と239の村がある。新揮はオーハン旗の政治、経済、文化、交通の中心である。この旗には、中学校は29校、教諭と教務員合わせて2,221名、生徒33,011名である。小学校は64校、教諭と教務員合わせて2,310名で、生徒35,295名である。この他、幼稚園101校。その内、モンゴル民族の幼稚園が3校ある（アリゴン2017：200）。この地域は、内モンゴルの農耕地域である。

### 第3節 赤峰市の民族教育の歴史

#### 4.3.1 清朝時代の赤峰市の民族教育

以下、ウラントガ主編の『民族教育概況』に沿って、赤峰市の民族教育発展の歴史を紹介する。まず、清朝時代の民族教育を以下のようにラマ寺院教育、書斎・塾教育、学堂・学校教育という3点にまとめている。

第一に、ラマ寺院教育の組織機構として、多数の寺院にはいくつかの分野（ラサン）が設置された。それらが寺院の中で相対的に独立する二級の組織機構、また寺院の教育機関となった。比較的広い寺院にはチョイララサン（教育分野）、マンバラサン（医学分野）、ドンコルラサン（天文分野）などが設置された。寺院によっては顯宗・密宗などの分野が設置されていない。

ラマ寺院の学習制度は、大体初級クラスと高等クラスに分けられている。初級クラスには、若いラマとともに成人ラマも定期的な宗教活動と労働に参加し、指導の経師の下で、チベット語のアルファベット文字とモンゴル語を学び、指導の経師は一人の学徒あるいは数人の学徒に教えている。学徒がメモして、日常語彙と読解を学んだ。高等クラスには、いろんな分野（ラサン）がある。初級クラスを卒業した学徒たちが、高等クラスに進学し、指導員からの、専門科目の授業を受け始める。卒業するためには少なくとも10年程度、長ければ何十年もかかるのである。学習方法は熟読、暗記、議論であり、また、厳しい試験制度がある。

学習内容は専門科目を除いて音楽、ダンス、絵画、詩歌、彫刻、天文、歴史、地理などの選修科目があり、それらを自らの好みと特徴に即して選ぶのである。寺院教育の状況から見ると、宗教、道徳、文化知識、専門知識などの教育内容は、大体4種ある。ジョオダ地域のラマ寺院が当時多くの人材を育成したのである。

第二に、書斎・塾教育には主に「必赤」書斎と金族会館と「艾理」書斎と金族会館があった。「必赤」書斎と金族会館は、1644年に、現在の赤峰市に、王の金族を培うために「必赤」書斎と金族会館を作った。「艾理」書斎と金族会館は、清代の中頃から末まで、ある旗の裕福な家族が「艾理」書斎と金族会館を作った。

第三に、学堂・学校教育は1902年に、ジョスト盟ハラチン右旗で、グンセンノロブがモンゴル社会での初めての近代式学校とされる崇正学堂を開いた。グンセンノロブは崇正学



堂に続き、モンゴル初の女子学校と軍事学校を設立している（岡本 2008：192）。

#### 4.3.2 中華民国時代の赤峰市の民族教育

中華民国は五族一家、教育は諸將政の母と提唱し、モンゴル各地が学校を重んじ、モンゴル民族と漢民族の子弟は共に就学をした。その後、モンゴルの各地で新しい学堂と学校が成立された。民国 2 年(1913 年)には、カザンの协理论希は教育を重視し、学校を成立させ、モンゴル民族の子供に文化科学の知識を学ばせた。同年 7 月、赤峰県にモンゴル族小学校 1 カ所が設置され、モンゴル語の授業を中心に中国語を併記した。民国 4 年(1915 年)には、克旗公署总管乐景涛が育英小学校を設立し、モンゴル語の授業に中国語を加えた。その後、本旗最初のモンゴル族小学校になった。民国 17 年(1928 年)の左旗・林東街には、蒙漢合同初級小学校が建立された。民国 18 年(1929 年)のカザン中旗(今寧県)は、大城(テソンサン)に成立された。モンゴル族小学校は同県で初めてのモンゴル族公立学校であり、モンゴル族の生徒が 100 名在学していた。その後、クラスをもう一つ追加した。民国 19 年(1930 年)に、クレムジュ廟、克己二カ所に、それぞれ初級モンゴル族小学校を建設した。その後、公立小学校となった。

#### 4.3.3 解放後の赤峰市の民族教育

##### ①民族の幼児教育

赤峰市民族の幼児教育は 50 年代後期にスタートし、1958 年から 1959 年にかけて、アルムチン旗、翁牛特旗、クロウ旗、オーハン旗、宁城県が、それぞれの保育所を開催し、モンゴル族の幼児を募集した。1958 年、贺旗联戸托幼稚園を設立した。1958 年までに、全市の民族幼稚園が 13 校まで増加、学年前の子供を含め、少数民族生徒数は 11,735 人に増えた。1922 年に、全市は少数民族の幼稚園 35 校であり、少数民族の生徒が 11,222 人増え、51%増加した。そのうち农村、牧畜区の少数民族在園生徒数园は 9,974 人であり、1,285(60%)人まで増えた。

##### ②民族初等教育

解放当時、昭盟地域には 20 の民族小学校があり、在校生徒が 1,000 人にも達していなかった。解放後、民族初等教育は急速に発展した。モンゴル族の小学校教育は、解放を受けて、昭盟地域の人民政府によって、次々と成立された。各民族人民の文化を発展させる切実な希望を受け、各地域の人民政府が、人々を励まし、積極的に民族小学校を回復あるいは拡大建設した。1947 年末までに、モンゴル族小学校の在籍生徒は 3,594 名まで増えており、建国当時、モンゴル族小学校は 167 校に急増し、在籍生徒は 8,831 名だった。1958 年には、「教育大躍進」の結果、小学校は 303 校となり、モンゴル在籍生徒は 23,701 名となった。1965

年、小学校は 33 校、旗の全日制公立小学校 8 校であり、学齡児童の入学率は元の 36% から 92% にまで上昇した。1966 年初め、全盟モンゴル族の牧読小学校 189 校であり、在籍生徒は 6,626 名であった。同年、全地域の全日制公立モンゴル族小学校が 496 校に発展し、在校生は 26,118 人となった。在学生数は 1947 年と 1949 年に比べてそれぞれ 7.3 倍、0.4 倍に増えた。1979 年全盟モンゴル族小学校は 668 校まで増加、在籍生徒は 55,905 名となった。同年には、国が出資し、初めての牧畜地域の寄宿制小学校である「白音ドアの徳小学校」が設立された。そこから集中的に全日制、公立、寄宿制の民族小学校を作り始めた。85 年までには、全市が牧畜地域の寄宿制センター小学校 21 校建てた。この措置は少数民族の初等教育の普及を大いに推し進めた。1985 年、赤峰市は自治区人民政府の評価を経て、自治区初の初等教育を普及させた盟市となった。

### ③民族普通中等教育

モンゴル族の中等教育は建国当時、昭盟には 3 つの民族中学校しかなかった。一つは、1946 年 9 月に設立した喀旗熱中中学校であり、1955 年、蒙漢連合王府府中学校と改名し、1958 年、高校のクラスを追加し、1959 年、純モンゴル族中学校となった。二つ目は、1949 年 1 月に成立された蒙漢総合昭盟中学校である。1955 年 11 月、蒙漢総合学校が分立して、元の学校が林東第一中学校となり、新しく成立された学校がモンゴル民族中学校となり、在籍生徒は 357 名であった。三つ目は、1949 年、元熱河省が内モンゴルにおいて作った昭盟中学校である。同校は師範クラスを追加し、在校生は千人近くいたという。課程は文系を中心に設置し、主に中国語で授業をし、モンゴル語の授業もあった。1952 年に、高校クラスを増設し、1953 年に、モンゴル語で授業する中学校クラスを増設した。1956 年に、モンゴル語で授業をする高校クラスを増設し、学校名を赤峰第一中学校に変えた。1978 年 9 月、赤峰モンゴル族中学校となった。解放後、特に中華人民共和国以来、小学校教育の発展につれて、中学校教育も急速に発展し、一定の規模を形成した。1959 年までに、モンゴル族中学校が 7 校となり、モンゴル族在籍生徒は 1,020 名に増加した。中学校が 1 校増え、高校モンゴル族在籍生徒は 177 名であった。1964 年にはモンゴル族中学校が 8 校に増え、中学在籍生徒が 1,561 名に増え、高校在籍生徒は 286 名に増えている。

1980 年から、盟教育庁は「高校の圧縮、中学校の調整、小学校の強化」との指導思想のもと、全盟の中学校配布に対し重点的に調整した。1981 年までに、モンゴル族高校は 28 から 14 校に圧縮し、中学校は 151 校から 92 校までに調整した。統計によると、1992 年全盟民族一般高校は 15 校であり、そのうちモンゴル族高校 14 校、民族共同高校 1 校であった。一般高校の少数民族在校生およびモンゴル族在籍生徒はそれぞれ 9,872 名と 8,865 名だった。民族一般中学校は 87 校であり、そのうちモンゴル族中学校とモンゴル族連合中学校 85 校であり、少数民族在籍生徒およびモンゴル族在籍生徒はそれぞれ 25,757 名と 21,567 名であった。

上述からみると、中華人民共和国成立前の赤峰市のモンゴル民族の教育システムは、家庭

教育、寺院教育、学校教育の三つの教育方式で形成されていたことを実証できる。

寺院教育の教育内容からみれば、宗教、道徳、文化知識、専門知識などの教育内容が大体4種あったことから寺院教育がモンゴル仏教文化、モンゴル文化の宣伝・学習に貢献しただけではなく、文化遺産の保存・伝承への貢献が高いことがわかる。

学校教育がモンゴル地域に浸透し始めた、1950年からは、寺教教育の役割が薄れ始めた。そのため、学校教育が、モンゴル民族の言語、文化を次の時代に伝承していくためには担い手になっていると言わざるを得ない。

## 第五章 赤峰市の牧畜地域における民族教育の現場

### 第1節 牧畜地域の民族小・中学校の変遷と地域の特徴

#### 5.1.1 アルホルチン旗の民族小・中学校の変遷

本章では、赤峰市の牧畜地域における民族教育の現場としてアルホルチン旗の学校統合前のバヤンウンドゥル小・中学校と学校統合後のバヤンウンドゥル小学校とチャブガ第五民族中学校の事例を取り上げる。アルホルチン旗のモンゴル民族小・中学校の変遷は以下の通りである。

アルホルチン旗の初めての小学校は、1945年10月にチャブガ杆廟街において設立された光復小学校で、生徒数は57名であった。1946年8月に、学校名を「チャブガ杆廟第一小学校」へと変更した。1946年4月に、元東モンゴル自治政府のハフンガ副主席が民族文化を復活させる目的で、小学校の復活活動を始めた。復活活動は、坤都小学校の復活から始まり、各地に相次いだ。年末には、小学校7校、生徒数584名、教師7名であった。1949年になると、全旗の小学校は144校、生徒数は5,337名、(そのうち女子生徒1,430人)、教職員189名であった。1956年には、小学校183校、生徒数14,746名、教職員442名となった。1966年から始まり10年間続いた「文化大革命」の時代では「民族問題は階級問題である」とみなされ、民族教育が圧殺された。1979年には混乱が止まり、小学校が全面的復興した。同年、全旗小学校数は397校、生徒数44,837名、教職員2,095名であった。

1986年～2002年までは各ソムの各ガチャに民族小学校はそれぞれ1校、あるいは、地域の広いガチャには、2校もあった。アルホルチン旗の北部に位置するバヤンウンドゥルソムは面積が広くて、遊牧生活が維持されている地域である。2005年までには、「バヤンチャガン小学校」、「シバリタイ小学校」、「マニト小学校」、「ダリハン小学校」、「シラボト小学校」、「バガバヤンウンドゥル小学校」、「タリンホア小学校」、「ヘリム小学校」、「アルフブ小学校」、「シナ小学校」、「チャガンエリガ小学校」、「ボハト小学校」、「スミンタラ小学校」、「オルム小学校」、「サバハト小学校」、「マンハト小学校」、「タラバイ小学校」、「バヤンウンドゥル総合中心学校」の計18の民族小学校があった。

2002年から、地域のソムを合併させた上、小学校と中学校を一つにする「小中一貫九年制学校政策」が採用され、比較的交通の便が良い地域から政策が施行され始めた。

2005年から、ソムの中心部に位置するバヤンウンドゥル総合中心学校への統合が始まった。2011年には、各ガチャの18校がバヤンウンドゥル総合中心学校に統合され、学校名を「バヤンウンドゥル小学校」へと変更した。その結果、各ガチャに小学校がなくなり、現在、バヤンウンドゥルソムには、一つの民族小学校があるのみとなり、各アイル・ガチャの民族小学校は閉校となった。

アルホルチン旗には、1958年まで中学校はなかった。生徒たちは小学校を卒業後進学を

希望すれば、遠く離れた都市部の中学校に進学した。1958年9月に初めてチャブガ(天山)にチャブガ第二モンゴル民族中学校が成立された。生徒が86名、教諭が8名であった<sup>4</sup>。

1965年になると生徒が500名、教諭が50名となった。1966年にはアルホルチン旗のハン・ソムにもう一つのモンゴル民族中学校として、アルホルチン第四民族中学校が設立された。この学校はバヤンホア・ソムより北にある地域の生徒が対象であり、生徒は100名近くいた。

文化大革命開始後、学校の秩序がみだれ、1968年に「軍宣隊」(軍人宣伝隊)が入り、チャブガ第二モンゴル民族中学校は破壊された。この中学校はその後1974年に再開され、アルホルチン第四民族中学校と合併した。生徒数は34名であった。

1971年からは小学校に併設される形で中学校が設立されたため、今回の調査の対象となったバヤンウンドゥル中学校も1971年に設立された。その後生徒数の増大に伴い、1976年には、アルホルチン旗の中学校数は76校まで増えた。1978年には、生徒数が5,326名となり、最大となった。

1986年～2002年の間、各ソムに中学校はそれぞれ1校だった。1986年の在籍生徒数は4,186名であり、その内、モンゴル族は4,063名、回族は20名、満族は88名、朝鮮族は8名、その他の少数民族は7名であった。教職員は332名いた。

2006年にはチャブガ民族中学校がチャブガに設立され、アルホルチン旗の南部地域の民族中学校6校が統合された。続いて、2011年にはチャブガ第五民族中学校がチャブガに設立され、アルホルチン旗の北部地域の民族中学校6校が統合された。その結果、「小中一貫九年制の学校制度」がなくなり、アルホルチン旗の民族中学校は現在、この二つの寄宿学校だけとなり、各ソムの民族学校は閉校となった。

### 5.1.2 対象地域の特徴

調査対象地域(図5)は、中国内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗である。

内モンゴル自治区赤峰市は、内モンゴル自治区の東南に位置し、その面積は約9万平方キロメートルで、人口は約460万人である。自治区の中でも最も人口の多い地域行政区である。その内約80万人がモンゴル民族である。赤峰市は、清朝時代から漢民族が流入し農耕化が比較的早く進んだ地域である。農耕地域と半農半牧の地域が広がり、遊牧地域も一部残されている。アルホルチン旗は赤峰市の東北に位置し、その面積は約14,277平方キロメートルで、人口は約29.6万人である。その内、モンゴル民族の人口は約11.3万人で、漢民族の人口は約17.6万人である。アルホルチン旗には農耕地域と半農半牧地域、それに牧畜地域が含まれ、11のソムと245村がある。バヤンウンドゥルソムは、満州時代に「モンゴリ的な特徴を損なわれず残っている牧畜地域」とされていた地帯であり、現在も牧畜業従事者は全労働人口の86.8%を占めており(『アルホルチン統計年鑑』2003:118)、遊牧生活が維持されている代表的な牧畜地域である。そのため大部分の生徒たちは、遊牧生活を体験し、

モンゴルの住居・食生活・年中行事にも参加している。バヤンウンドゥルソムの人口は約1万人で、その内、モンゴル族は約92.3%を占め、漢族は約7.5%を占めてあり、昔からモンゴル族の割合が高く、主に牧業を営んで来た地域である。バヤンウンドゥルソムは山地に囲まれており、このような地理的な条件により、交通が不便である。現在、コンクリート道路は敷設されておらず、雨や雪で通行止めになることが多い。



図 5 調査地  
(出典:内蒙古自治区地図(2004)を基に筆者作成。)

表 13 バヤンウンドゥル地域とチャブガの差異  
出典：『阿鲁科尔沁旗统计年鉴』（2003：118）に基づき筆者作成。）

	バヤンウンドゥルソム	チャブガ
人口	約 1 万人	約 30 万人
民族構成	モンゴル民族：約 92.3% 漢民族：約 7.5%	モンゴル民族：約 35% 漢民族：約 65%
生業体系	牧畜業従事者約 86.8%	第二次、第三次産業従事者約 49.8%
地域の特徴	遊牧生活が維持されている代表的な牧畜地域、 山地に囲まれているため、交通が不便である。	アルホルチン旗の政治・経済・交通の中心地、 ソムに比べて漢化が進んでいる。

チャブガはアルホルチン旗の中心地で、比較的に経済が発展し、交通も便利で、ソムに比べて漢化が進み、都市化している。漢民族の占める割合も高く、社会生活の使用言語はほぼ

漢語になっている。バヤンウンドゥルソムは、昔からモンゴル族の割合が高く、民族文化が維持されている牧畜地域である。社会生活言語はほぼモンゴル語になっている。両地域の違いは表 13 の通りである。

## 第2節 統合前のバヤンウンドゥルソムの小学校の事例

### 5.2.1 学校統合前の 18 校の状況

統合前の学校の状況について、A 氏は次のように語った。A 氏は、統合前の「シナ小学校」の教諭として、12 年間勤めた経験がある。

#### <事例 1>A 氏（「シナ小学校」の教諭、40 代、女性）

1998 年から、「シナ小学校」で勤め始めた。その時、教諭は 4 名、生徒は 38 名だった。4 人の教諭がすべての科目を担当するという状況だった。教室は足りていたが、体育館などの施設がなかった。その時、電話もなかった。ソムに来ないと教育局の情報も得られない状態だった。学校の統合で施設がとても良くなった。

この事例から、統合前の「シナ小学校」の施設が不十分であったことが分かる。また、教育局との情報交換が困難だったことが分かる。

統合前の学校の状況について、B 氏は次のように語った。B 氏は、統合前の「バハト小学校」の教諭として、18 年間務めた経験がある。

#### <事例 2>B 氏（「バハト小学校」の教諭、50 代、女性）

1995 年から、「バハト小学校」で勤め始めた。その時、教諭は 2 名、生徒は 19 名だった。2 人の教諭がすべての科目を担当するという状況だった。教室は足りていたが、体育館などの施設がなかった。この地域で冬は寒いから、他の教諭は生活に慣れなくて、途中で仕事をやめて行く人が多かった。その時、1 人ですべての生徒の面倒を見るのは大変だった。生徒の教科書も遅く届くことがあった。

この事例から、統合前の「バハト小学校」の施設が不十分であったことが分かる。また、教諭が不足していたこと、教科書の配達が遅れていたことが分かる。

### 5.2.2 バヤンウンドゥルソムの小学校の事例

以下は筆者の1989年～1994年頃の小学校時代の経験である。筆者は、先述の18校の一つである「バヤンウンドゥル総合中心学校」の生徒として、当時の教育を経験した。

### ①日常生活

1989年に、バヤンウンドゥル小学校に入学した。当時の生徒は全員が家から通っていた。同じ地域の子供で、両親も皆顔見知りだった。大雪や洪水の時、誰かが頼まなくても、互いに子供を身守っていた。家から学校までの間に川が流れていた。大雨が降った時、保護者達が馬で迎えに来る。子供たちを馬に乗せて、川を渡っていた。友だちと喧嘩したり、或は服を汚したり、授業から遅刻した時、地域の保護者から注意された。期末試験で良い成績を取った時や人を助けた時、みんなに褒められた。

1年生の時からは、毎日、朝4時に起床する。母と一緒に牛乳搾りをした。私の役割は子牛を紐で柱と結ぶことであった。牛乳搾りが終わると、結んだ紐を外すことで、子牛が母牛のもとに戻り、再び残りのミルクを飲むことができた。牛乳搾りが大体6時に終わる。その後、母がミルクを待って家に戻り、朝ご飯を作る。私は6時から30分、牛の糞を干した。牛の糞は、暑くなる前に干した方がメリットはいっぱいあると母に教えてもらった。例えば、土地とくっつかない、糞の中に、虫が入らないなどがあった。

当時は、1年生の生徒のほとんどの子供が1～1000までの数を数えるようになっていた。毎日家畜の数を数えることを子供たちに担当させた。そのことで、子供たちが自然に数学を勉強できていた。

### ②学校の授業

1年生の時、学校では、モンゴル民族の挨拶の仕方と年上の人の呼び方などを教えてもらった。2年生の時、モンゴル民族の生活習慣とタブーのことを教えてもらった。例えば、モンゴルゲルの門を踏んではいけない、塩を手で渡してはいけない、夕方は歌を歌ってはいけないなどがある。3年生～6年生の時は、主にモンゴル民族の伝統的な文化に関する知識を身に付けた。学校では、ほとんどモンゴルの伝統的な遊びをした。例えば、羊の骨のザーガーなどがある。放課後、家では、骨占いも良くやった。

### ③伝統行事への参加

小学校では、毎日第7限が活動の授業だった。内容として、主に、モンゴル民族の民謡、舞踊、馬頭琴の三つのグループに分かれて、体育館で、教えるか、練習していた。毎年、ナーダムに参加するのも一つの目的であった。「ナーダム」とはモンゴル語で〈祭り〉という意味である。モンゴル国、内モンゴルでは草原を舞台にして主に競馬、相撲、弓の三大競技が行われる。また、伝統的民族楽器の馬頭琴の演奏や民族舞踊などを披露することもある。ナーダムの開始の時、モンゴル民族の民謡を歌う。夕方には、ナーダ



ムの現場で、学校から組織した子供たちの演技会がある。ほとんどの生徒が参加するようにしていた。演技会では、子供たちが今まで練習してきた民謡を歌ったり、踊りを踊ったり、馬頭琴の演奏をする。牧民たちは、老人から子供まで皆でこの演技会を見に行っていた。

1990年代は、牧畜地域では、定住化の政策がまだ進められていない時代だった。民族文化の基礎である伝統的な遊牧生活が維持されていた。現在の小学校では、1年生からモンゴル語を教え、2年生からモンゴル語と中国語を教え、3年生からモンゴル語、中国語、英語を教えるようになっているが筆者の小学校時代には、1年生からモンゴル語を教え、3年生から中国語を教えるようになっていた。「三言語教育」の政策は実施されていなかった。そのため、モンゴル語の時間数が多く、民族文化に関する知識の説明をする時間が十分あった。

### 第3節 統合後のバヤンウンドゥル小学校の事例

#### 5.3.1 調査対象の学校

バヤンウンドゥルソムには、2005年までに、アイル、ガチャの18の小学校とバヤンウンドゥルソムの中心部に置かれていたバヤンウンドゥル総合学校を合わせて19校の学校があった。2011年までに、各アイル、ガチャの18校の民族小学校を移住させ、バヤンウンドゥルソムの中心部には、一つだけ寄宿制小学校が成立した。学校の名を「バヤンウンドゥル小学校」へと変更した。全生徒数は、469名であった。

統合後の学校の教諭の状況と通学生徒について、C氏は次のように語った。

＜事例3＞C氏（バヤンウンドゥル小学校の教諭、50代、男性）

学校の統合に伴い、110名の教諭が必要であることに対し、現在は61名の教諭が勤務し、教諭が不足している。20名の先生を他の学校から借りて使っている。

子供の中には都会の学校に通う場合もある。地域の学校に通うべき子供たちは620名のはずだったが、151名の生徒は他の都会や近くのソムの学校に移った。その理由としては、経済的原因、孫の世話、出稼ぎがあると思う。

この事例から、学校の統合により、統合後の学校の教諭の不足状況と牧畜地域の生徒数が確実に減ったことが分かる。

2018年現在は、バヤンウンドゥル小学校（写真1）は牧畜地域バヤンウンドゥルソムの

唯一の民族小学校である。



写真1 バヤンウンドゥル小学校

(出典：2014年3月、バヤンウンドゥル小学校にて、筆者撮影。)

5.3.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表4に示すように、小学1年の授業はモンゴル語、数学、体育、サッカー、音楽、美術、品德、学校、担当、安全、故郷の11科目がある。モンゴル語は毎日1～2時間で、週当たり8時間である。数学は週5時間になっている。その他、体育の科目が週2時間で、サッカーの科目が1時間となっている。担当の科目が週3時間となっている。学校、品德、音楽と美術は週2時間である。安全、故郷の科目が週1時間となっている。

表4 バヤンウンドゥル小学校1年生の時間割

(出典：バヤンウンドゥル小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50～8:30	数学	数学	数学	数学	数学
2限	8:40～9:20	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
3限	9:50～10:30	品德	体育	音楽	学校	体育
4限	10:40～11:20	音楽	モンゴル語	体育	安全	品德
5限	14:40～15:20	美術	故郷	学校	サッカー	美術
6限	15:50～16:30	モンゴル語	担当	モンゴル語	担当	担当
7限	16:40～17:20					

モンゴル民族の関する科目としては、まずモンゴル語がある。毎日1～2時間であり、週8時間となっている。その他、故郷の科目である。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。詳細な内容は後で述べる。

以下の表5に示すように、小学2年生の授業はモンゴル語、中国語、数学、体育、サッカー、音楽、美術、品德、学校、安全、故郷の11科目がある。モンゴル語は毎日1～2時間で、週当たり8時間である。数学は週当たり5時間となっている。中国語が週当たり3時間となっている。その他、体育、品德、学校、音楽と美術は週2時間である。サッカー、安全、故郷の科目が週当たり1時間となっている。

2年生になると、中国の科目が増えている。中国内モンゴルでは、二言語教育は2年生から始まっている。中国語の科目が増えるにつれて、モンゴル語の時間が週1時間減ることとなっている。モンゴル文化に関する科目としては、1年生と同じくまずモンゴル語がある。その他、故郷の科目である。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。詳細な内容は後で述べる。

表5 バヤンウンドゥル小学校2年生の時間割

(出典：バヤンウンドゥル小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50～8:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
2限	8:40～9:20	数学	数学	数学	数学	数学
3限	9:50～10:30	中国語	品德	学校	品德	故郷
4限	10:40～11:20	モンゴル語	美術	中国語	中国語	体育
5限	14:40～15:20	安全	体育	音楽	美術	モンゴル語
6限	15:50～16:30	学校	モンゴル語	体育	サッカー	音楽
7限	16:40～17:20					

以下の表6に示すように、小学3年生の授業はモンゴル語、中国語、英語、数学、体育、音楽、美術、品德、科学、労働、サッカー、安全、故郷の13科目がある。モンゴル語は毎日1～2時間で、週当たり8時間である。中国語が週当たり3時間となっている。英語は週当たり3時間となっている。数学は週当たり5時間になっている。その他、体育、科学と作文の授業が週当たり2時間である。音楽、美術、品德、安全、朗読、民族の科目が週当たり1時間となっている。

3年生になると、英語の科目が増えている。中国内モンゴルでは、三言語教育は3年生から始まっている。モンゴル文化に関する科目としては、2年生と同じくまず、モンゴル

語がある。その他、故郷の科目がある。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。

表 6 バヤンウンドゥル小学校 3 年生の時間割

(出典：バヤンウンドゥル小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	7:50～8:30	モンゴル語	英語	英語	英語	モンゴル語
2 限	8:40～9:20	中国語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	中国語
3 限	9:50～10:30	数学	数学	数学	数学	数学
4 限	10:40～11:20	美術	中国語	美術	音楽	品德
5 限	14:40～15:20	モンゴル語	品德	科学	体育	モンゴル語
6 限	15:50～16:30	音楽	労働	学校	モンゴル語	品德
7 限	16:40～17:20	体育	品德	安全	故郷	サッカー

### 5.3.3 「故郷」の時間の教育内容の分析

モンゴル文化に関する科目としてはモンゴル語と「故郷」がある。

まず、「故郷」の時間は 1 週間に 1 時間である。この学校では、「故郷」の 1 時間を用いて、モンゴル民族の伝統的工芸品について教えている。新学期の始めに、この「故郷」の担当の教諭から生徒たちに、家族と一緒に一つのモンゴル民族の伝統工芸品を手造りする宿題を残す。次の週から生徒の出来上がりの作品を「モンゴル文化交流室」(写真 2) にて、展示し、作者の順番で作品の紹介するようになっている。同じ物を作った生徒たちが一つのグループになって、手造りの過程と各部分の名前からどんな時に使うもの、どう使うなどの説明をする。以下はその作品 (写真 3～6) である。



写真 2 「モンゴル文化交流室」の様子

(出典：2014 年 3 月、バヤンウンドゥル小学校にて、筆者撮影。)



写真3 モンゴルゲル



写真4 タバコ入れ

(出典：ともに 2014 年 3 月、バヤンウンドゥル小学校にて、筆者撮影。)



写真5 牛車



写真6 鞍

(出典：ともに 2014 年 3 月、バヤンウンドゥル小学校にて、筆者撮影。)

この授業の内容から見ると、牧畜地域では、教諭たちは、民族伝統文化を教室の中で、生徒たちに説明して教えているのみなく、モンゴル民族文化に触れ合う機会を作ってくれたことが分かる。

#### 5.3.4 民族文化の伝統行事への参加状況

牧畜地域で毎年行われているナーダムには、学校側が積極的に参加している。このでは毎年7月末に3日から4日間行われる。この学校の校長先生の話によると、毎年学生たちは任意でこのナーダムに参加している。男子学生は子供の相撲、子供の弓、競馬にも参加することがある。この他、馬頭琴の演奏と民族舞踊にも参加しているという。このバヤンウンドゥルそむのナーダムはちょうど夏休みの期間中に行われるが、ナーダムに参加する生徒た



ちは、学校に集まり、馬頭琴の演奏の練習と舞踊の練習をしているという。競馬と相撲、弓に参加する生徒は、自分たちの家の練習できるところに集まり練習する。例えば、同じ村の子供たちが集まり、弓と相撲をして遊ぶ。

校長の話によると、この毎年のナーダムはモンゴルの子供たちにとって、最も民族文化を体験し、理解できる機会になっているという。また、子供たちの伝統文化に対する好奇心を育て、アイデンティティにも大きな影響を与えており、生徒たちは楽しんで参加したことで伝統文化が自然に身に付けることができると語った。

以下はバヤンウンドゥル小学校の伝統文化体験の授業様子と実際のモンゴルゲルの模擬を用いて、モンゴルゲルの組み立てについての説明している様子である（写真 7）。教諭への聞き取り調査で、バヤンウンドゥル小学校では、1 学期に 4 回、「担当」の授業を用いて、民族伝統文化の専門家を招いて、授業をしていることが分かった。



写真 7 モンゴルゲルの組み立てについて説明している様子

（出典：2014 年 3 月、バヤンウンドゥル小学校にて、サ教諭提供。）

このように、モンゴル民族伝統文化の専門家を招いて、モンゴル民族伝統文化に関する知識を教える授業は、学校統合前にはなかった。学校統合により、生徒たちは、実際の遊牧生活から離れ、モンゴル民族文化に触れ合う機会が少なくなったことを補うために取った教育であると考えられる。

#### 5.3.5 生徒たちの日常の寄宿生活実態

表 7 をみると、本学の寄宿制生徒たちの一日の流れが分かる。寄宿生活をしている生徒たちは、5 時 30 分に起床、体操、自習、朝食を済ませて、8 時から 1 限の授業が始まる。午前中は 4 つの授業がある。1 時限の授業時間は 40 分である。2 限目と 3 限目の間に 30 分の目の体操がある。昼食の時間は 40 分で、昼寝の時間は 1 時間 40 分である。中国では、職場は日本と比べて、昼休みが長く、昼休みは家に帰って食事をするのが一般的である。また、中国では、冬と夏の休み時間が変わり、夏は昼寝の時間が設けられる。午後には、3 つの授業がある。5 時から朗読の時間が 40 分ある。その後、夕食の時間 1 時間と 40 分の復習時間が 2 回あり、8 時 30 分に就寝となっている。生徒たちが、教室外で活動できるのは、朝の体操（5:50～6:20）だけになっている。

表 7 寄宿生徒たちの一日

（出典：バヤンウンドゥル小学校提供のモンゴル語資料に基づき筆者作成。）

起床	5:30	昼寝	12:30～14:10
体操	5:50～6:20	予備	14:20～14:30
自習	6:20～7:00	5限	14:30～15:10
朝食	7:00～7:50	6限	15:20～16:00
予備	7:50～8:00	7限	16:10～16:50
1限	8:00～8:40	朗読	17:00～17:40
2限	8:50～9:30	夕食	17:40～18:40
目の体操	9:30～10:10	復習 1	18:40～19:20
3限	10:10～10:50	復習 2	19:30～20:10
4限	11:00～11:40	寝る	20:30
昼食	11:40～12:20		

寄宿生の日常生活について、寄宿舎の管理人の D 氏は次のように語った。

<事例 4>D 氏（バヤンウンドゥル小学校の寄宿舎管理人、40 代、女性）

この一日の課程表は、生徒たちの一日の生活の流れである。子供たちは、自分の遊ぶ自由時間がない。学校の統合により、寄宿制学校になったことで、生徒数も前より増え、学校の管理が厳しくなった。生徒たちの安全を考えただけで、勉強する時間を長くしている。

D 氏の語りから分かるのは、学校統合により学校側が責任と管理を強くするという必要性を認識していることが分かる。

## 第4節 統合前のバヤンウンドゥル中学校の事例

### 5.4.1 調査対象の学校

バヤンウンドゥル中学校（写真8）は牧畜地域バヤンウンドゥルソムの唯一の民族中学校であり、1958年に設立され、2010年までに至る伝統的民族中学校である。この学校を2010年3月7日に訪問した当時、生徒数は245名であった。自宅通学率は64%で、寄宿率は36%であった。



写真8 バヤンウンドゥル中学校

（出典：2010年3月、バヤンウンドゥル中学校にて、筆者撮影。）

### 5.4.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表8に示すように、中学1年生の授業はモンゴル語と中国語、数学と英語、地理と体育、生物と音楽、歴史と美術、政治と情報の12科目ある。モンゴル語、漢語、数学、英語は毎日1時間で、1週間に5時間である。その他、地理と体育、生物と歴史、政治の科目は1週間に2時間で、音楽と美術、情報が1週間に1時間である。そのほか8講時は「活動」が2時間と「朗読」が2時間となっている。



モンゴルの民族文化に関する科目としてはまず「モンゴル語」がある。「漢語」と「英語」は同じく毎週 5 時間である。歴史に関しては「中国史」と「世界史」の内容が中心で、モンゴルの歴史はわずかである。例えば、教科書は 6 冊あって、中国史は 4 冊、世界史は 2 冊で、モンゴル史はない。中国史 4 冊は合計 763 ページもあるが、その内に、モンゴルに関する内容はわずか 6 ページである。世界史は 2 冊で、400 ページの内にモンゴルに関する内容はほとんどない。しかし、教科書はいずれもモンゴル語で書かれたものである。

表 8 バヤンウンドゥル中学校一年生の時間割

(出典：バヤンウンドゥル中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	8:00～8:40	モンゴル語	数学	漢語	数学	モンゴル語
2 限	8:50～9:30	数学	中国語	数学	モンゴル語	英語
3 限	10:15～10:55	地理	音楽	英語	英語	中国語
4 限	11:05～11:45	英語	モンゴル語	政治	体育	数学
5 限	14:20～15:00	体育	英語	生物	歴史	政治
6 限	15:15～15:50	中国語	歴史	モンゴル語	中国語	モンゴル語
7 限	16:05～16:45	生物	美術	数学	地理	情報
8 限	16:55～17:35	活動	朗読	活動	朗読	会議

#### 5.4.3 「活動」及び「朗読」の時間の教育内容の分析

まず、「活動」の時間は 2 時間である。バヤンウンドゥル中学校では、「活動」の 1 時間を用いて、『モンゴル民族の歴史』<sup>5</sup>という教科書を使って教える特別の授業を設けていた。もう 1 時間は民族の踊りと馬頭琴などの練習をしていた。

また、歴史の科目を担当する E 教諭は次のように語っていた。

<事例 5>E 教諭（バヤンウンドゥル中学校の歴史教諭、40 代、男性）

この教科書を用いて、「活動」の時間に「モンゴル民族の歴史」という特別の授業を週に 1 回行っている。わたしは『モンゴル民族の歴史』という本は、自民族の歴史を生徒たちに教え、次世代に伝承するために極めて大切なテキストであると考えている。2006 年までは中学生にモンゴル民族の歴史を教えるための教科書がなく、民族の歴史を学習する機会がなかった。大学へ進学しない牧畜民の子供たちが自民族の歴史を学ぶことができなかった。自民族の歴史を知らない人をなくすためにこの授業を開講した。

次に、「朗読」の2時間をみると、バヤンウンドゥル中学校では、この朗読の時間で80%の生徒が『モンゴル民族の歴史』を読んでいる。

内モンゴル教育出版社によると、2006年5月に出版された『モンゴル民族の歴史』という教科書は内モンゴル自治区義務教育実験教科書で、モンゴル民族の歴史をモンゴルの子供たちに教え、歴史の授業を補うためのものである。しかし、歴史の時間にはこの教科書を授業で扱うことはなく、「朗読」の時間に生徒が自主的に使用するものであり、必ず読ませるとは限らない。この教科書は5つの部分、25課からなり、178頁である。2010年の現地調査で、バヤンウンドゥル中学校では約80%の生徒が学校でこの教科書を読み、20%の生徒が家、あるいは寮で読んでいた。

#### 5.4.4 民族文化の伝統行事への参加状況

4月5日は清明節で、モンゴル語の教諭の話によるとこの学校の学生の90%がお墓参りに行っているという。

アギ氏(中学校三年生、女子)の話によると、クラスには30人いて、雪の日に全員で、ウサギ狩りに行ったという。これも歴史の授業で「モンゴル民族は昔から動物狩りに優れている」ということを学び、男子生徒たちが「狩りを経験したい」という意見を出したので計画したという。しかし、ウサギ狩りが禁じられているため、雪の上でウサギの足跡を追いかける方法や、狩りのしかたを教えたという。歴史担当の教諭の話によると、このような活動によって、モンゴル民族の伝統的な生活に興味を持つようになったという生徒たちの感想が多かったという。

また、別の活動に参加した生徒のフスル氏(中学校三年生、男子)への聞き取り調査によると、自分の故郷の物語で有名な「鞍山」に登る活動をしたという。担当の教諭の話によると山に登る活動を通じて、地域の物語の説明をし、生徒たちに故郷を愛し、故郷に誇りを持ち、自分の故郷を守っていくモンゴル民族の伝統的な認識を意識させることが目的であるという。

ソリガ氏(中学校2年生、女子)への聞き取り調査によるとみなで故郷の有名な寺に観光に行ったという。教諭が生徒たちに、この寺の由来、歴史などを紹介し、綺麗な景色を見学したという。「寺への観光を通じて、自然の美しさを楽しみ、自然を守り、万物を愛するモンゴル民族の心を育てることが目的である」という。活動に参加した生徒たちは寺について、良い勉強になったと述べており、生徒は仏教の起源に関する話とモンゴル民族と仏教の関わりを教えてくれたと言っている。

以下は統合前のバヤンウンドゥル中学校の伝統文化体験の写真である(写真9,10)。この写真は、チンキスハンの頃から、続く夏の祭りの様子である。競馬、相撲、弓の三つの競技と、昔ながらの生活を再現する。先述の通り、バインオンドル中学校では、祭りの前

に生徒たちに弓や馬頭琴などの練習を「活動」の時間に行う。写真 9 は競馬をする中学生 1 年生の生徒である。



写真 9 競馬



写真 10 牛車

(出典：2013 年 8 月、バヤンウンドゥルソムのナーダム現場にて、ア氏撮影。)

#### 5.4.5 生徒たちの牧畜地域での日常の生活実態

統合前のバヤンウンドゥル出身の生徒の 1 日の生活は次のとおりである。朝 6 時に起きた後、家族とともに、家畜の世話をする。7 時に朝ご飯を済ませ、7 時半に登校する。11 時 45 分に午前中の授業が終わり、12 時に帰宅し、昼ご飯を食べる。その後、昼寝をし、14 時に再び学校に行く。午後の授業は 17 時 35 分に終わり、18 時ごろ帰宅する。食事をした後、また家事の手伝いをする。例えば、男子は父と一緒に馬の世話をする。女子は母の牛乳搾りを手伝うことがある。家族とはモンゴル語で交流する。夏になると、村の男子と若者が集まり、モンゴル相撲、弓矢の練習を楽しむことが多い。女子たちも村の大人の女性たちが民族衣装を作ることに興味を持ち、見学に行く。

### 第 5 節 統合後のバヤンウンドゥル中学校の事例

#### 5.5.1 調査対象の学校

バヤンウンドゥル中学校は、1971 年に設立され、2011 年にチャブガ第五民族中学校に統合されるまで続いた民族中学校である。チャブガ第五民族中学校（写真 11）は、バヤンウンドゥル中学校を含む 6 校の民族中学校を統合した寄宿制民族中学校である。どれもモンゴル語で授業を行う寄宿制民族中学校であるが、モンゴル語でコミュニケーションができて、生徒たちは民族の日常生活と伝統行事への参加ができなくなっている。



写真 11a、b チャブガ第五民族中学校

(出典：a、bともに2015年6月、チャブガ第五民族中学校にて、筆者撮影。)

2011年に、バヤンウンドゥル中学校がチャブガ第五民族中学校に統合された時、旗政府の要請で統合先のチャブガ第五民族中学校に移転したモンゴル語担当のF教諭は、子供のモンゴル語能力の現状を以下のように証言している。

#### <事例6>F教諭（チャブガ第五民族中学校モンゴル語教諭、40代、女性）

学校の統合から3年間担当しているクラスの生徒36名の中に、都会で育った子供が5人と遊牧生活体験のある子供が31名いた。都会で育った5名はモンゴル民族の日常生活で使用する言葉すら理解できない時もあった。例えば、以前は五家畜の糞に関してあまり説明する必要がなかったが、都会の子供はその名前すらほとんど分からないので、時間の制限もあり、いちいち説明して理解させるのは難しい。今後は牧畜地域から来た生徒たちも都会の子供たちと同じように、遊牧生活に密着した言葉への理解が難しくなる心配がある。

羊とヤギ、牛、馬とラクダの糞はそれぞれの特性により、燃料と肥料、堆肥、虫除けなどに使い分けられていたため、それぞれ異なる単語として定着していた。それが分からなくなっていることは民族の文化生活に根ざした語彙の消失というモンゴル語能力の質的变化を象徴している。

調査対象である学校の基本状況は表 9 の通りである。

表 9 調査対象の学校

(出典：現地調査の結果に基づき筆者作成。)

学校	バヤンウンドゥル中学校	チャブガ第五民族中学校
設立年	1971 年 (2011 年にチャブガ第五民族中学校に統合)	2011 年
生徒数	245 名 (2010 年時点)	1,427 名 (2014 年時点)
自宅通学率	約 64%	約 4%
寄宿率	約 36%	約 96%

統合後の生徒の状況について、チャブガ第五民族中学校の教務主任の G 教諭に聞いた。<sup>6</sup>

#### <事例 7>G 教諭 (チャブガ第五民族中学校教務主任、50 代、男性)

毎年、100 名以上の生徒が不登校となっている。家から遠く離れたチャブガの環境に慣れなかったことが主な理由と考えられる。また、寄宿舎料や食費、さらに交通費にかかる経済的な負担が重く、学校が続けられなくなるケースもある。

設立時の生徒数は 1,557 名で、進学の実績もよかったため、もう一つの民族中学校からの転校生もいて、2012 年には 1,658 名となった。しかし、その後 1 年生の入学生が、642 名から 357 名に減少し、2015 年には全校の生徒数も 1,273 名に減少した。経済的理由が大きいと考えられる。

この事例からは、学校の統合により、生徒数が減ったことが分かる。

#### 5.5.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表 10 に示すように、中学 1 年生の授業はモンゴル語、中国語、数学、英語、地理、体育、生物、音楽、歴史、美術、政治、情報の 12 科目ある。モンゴル語、漢語、数学、英語は毎日 1 時間で、一週間に 5 時間である。その他、地理と体育、生物と歴史、政治の科目は一週間に 2 時間で、音楽と美術、情報が一週間に 1 時間である。「活動」が 2 時間と「朗読」が 2 時間となっている。

モンゴルの民族文化に関する科目としてはまず「モンゴル語」がある。「漢語」と「英語」は同じく毎週 5 時間である。歴史に関しては「中国史」と「世界史」の内容が中心で、モンゴルの歴史はわずかである。例えば、教科書は 6 冊あって、中国史は 4 冊、世界史は 2 冊

で、モンゴル史はない。中国史 4 冊は合計 763 ページもあるが、その内に、モンゴルに関する内容はわずか 6 ページである。世界史は 2 冊で、400 ページの内にモンゴルに関する内容はほとんどない。<sup>7</sup>しかし、教科書はいずれもモンゴル語で書かれたものである。統合前後の二つの学校の時間割を比較してみると、時間数に変化はなかったことが分かる。

表 10 チャブガ第五民族中学校一年生の時間割

(出典：チャブガ第五民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	8:00～8:40	モンゴル語	中国語	中国語	数学	数学
2 限	8:50～9:30	数学	モンゴル語	地理	モンゴル語	英語
3 限	10:15～10:55	英語	英語	歴史	政治	中国語
4 限	11:05～11:45	体育	数学	英語	数学	モンゴル語
5 限	14:20～15:00	中国語	政治	体育	英語	生物
6 限	15:15～15:50	地理	情報	数学	モンゴル語	歴史
7 限	16:05～16:45	音楽	生物	モンゴル語	中国語	美術
8 限	16:55～17:35	活動	朗読	活動	朗読	会議

### 5.5.3 「活動」及び「朗読」の時間の教育内容の分析

チャブガ第五民族中学校では、「活動」の時間を用いて、野菜の栽培活動（写真 12）を行っている。教諭への聞き取り調査によれば、民族の踊り、馬頭琴などの練習をしているが、参加する生徒数が少ない。また、ほとんどの生徒がサッカーをしているという。



写真 12（チャブガ第五民族中学校の農耕体験）

(出典：2015 年 6 月、チャブガ第五民族中学校にて、筆者撮影。)



歴史教科の主任の話によるとこの『モンゴル民族の歴史』という教科書は、全体として教育部全日制義務教育歴史教科書基準に準拠している。同書は、モンゴル民族の歴史をモンゴルの子供たちに教え、歴史の授業を補うためのものである。このモンゴル民族歴史の内容は、歴史の進学試験に 20%を占める。しかし、歴史の授業時間には直接この教科書を使わず、朗読の時間に学生が自主的に使用するものである。

6 人の歴史の教諭の話によると、この「モンゴル民族の歴史」という本が中学校 1 年生の時、配布されている。現在は、3 年生になると、試験準備のために使っている。3 年生のほとんどの生徒がこの本を古紙回収で売ったことに教師たちは驚いている。教師たちもこの教科書を授業で扱って、教えたいと考えているが、学校側から時間をとることが難しいという理由を示され、実現していない。そこで仕方なく、試験対策のために、重要な部分を試験対策用のプリントにして、学生たちに配っている。3 年生の生徒たちへのインタビューでは、この『モンゴル民族の歴史』は読んだことがなく、教諭から配られた試験対策用のプリントを暗記しているだけであると話していた。

チャブガ第五民族中学校の生徒たちが本を読まずに売っていることは、教師も生徒も、自民族の歴史に愛着がないことを示している。この『モンゴル民族の歴史』は、試験対策のためのものとししか考えられていないと思われる。授業時間には直接この教科書を扱っていないことから、少数民族の伝統文化、歴史を重視していないと言える。

チャブガ第五民族中学校では、「朗読」の時間では、この『モンゴル民族の歴史』という教科書をほとんど読んでいない。この時間は主に英語や数学など苦手な科目の復習や補習に充てられる。

一方、チャブガ第五民族中学校生徒の多くは、この教科書を読まないで、古紙回収業者に売っていたことが 2015 年の現地調査で分かり、教諭たちも驚いていた。歴史科担当の教諭の H 氏は次のように話している。

#### <事例 8>H 教諭（チャブガ第五民族中学校の歴史教諭、30 代、女性）

この教科書は、高校進学試験で出題される割合は 20%で、80%が「中国史」と「世界史」から出題されている。歴史の授業では中国史と世界史を教えている。『モンゴル民族の歴史』の内容については、試験対策として、試験によく出る部分のみ練習問題としてプリントし、3 年生の生徒に配るようにしている。

このようにチャブガ第五民族中学校では、モンゴル民族の歴史には、試験対策の練習問題を通して触れるのみで、『モンゴル民族の歴史』を直接読むことはないことが明らかとなった。

#### 5.5.4 民族文化の伝統行事への参加状況

チャブガ第五民族中学校では、民族文化を継承させる目的でモンゴルゲル（写真 13）が設置されていた。しかし、ここではゲルの組み立てなどの実習が一回もなく、ドアに鍵をかけて、学校の敷地内に置かれたままである。生徒たちは、周辺の畑で野菜の栽培を行っているが、それはモンゴルの伝統文化とは関係のない活動である。



写真 13 a、b チャブガ第五民族中学校校内で設置されたモンゴルゲル

（出典：a、bともに2015年6月、チャブガ第五民族中学校にて、筆者撮影。）

1週間に1回の活動時間があり、この時間を利用して、植物を育てる活動を行っている。具体的には以下の通りである。学校内の庭には、じゃがいも、ネギ、人参、胡瓜、茄子、トマト、ピーマン、スイカ、インゲン（写真 14）などを植えていた。学校からクラスごとに土地を分ける。その後、クラスごとがその分配された土地で、自分たちが何を植えるか相談して決める。その後、全員参加で、作業を進める。秋になると、各野菜と果物を収穫し、学校の食堂に売って、そのお金をクラスの費用にする。生徒たちは、何を世話することを楽しみにして、暇な時もその様子を見に行くと言う。



写真 14 植えた野菜

（出典：2015年6月、チャブガ第五民族中学校の校内にて、筆者撮影。）



活動の時間を利用し、植物を育てる活動により、子供たちが農耕文化に自分自身で参加し農耕文化を身に付けることになる。逆に、遊牧文化からは切り離されることになる。

#### 5.5.5 生徒たちの日常の寄宿生活実態

チャブガ第五民族中学校の96%の生徒が寮に住んでいる。1日の日課表が決められ、それによって行動する。自分の自由時間はほとんどない。最初は、月に1回4日間の休みがあり、その時実家に戻ることが許可される。ほとんどの生徒は実家が遠くて、交通が不便なので、4日間の内2日間は移動のために使い、家で過ごすことができるのは2日間だけである。2013年からは1週間で1日休みがある。休みの日だけ学校から出ることができる（表11）。

表 11 寄宿制生徒の一日の勉強と休憩時間割

（出典：チャブガ第五民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。）

起床ベル	5:30
体操	5:40～6:00
準備	6:00
朗読	6:05～6:40
朝食	6:40～7:15
寮から出る時間	7:15
掃除	7:15～7:45
会議	7:45～7:55
1 限	8:00～8:40
2 限	8:50～9:30
目の体操	9:30～9:35
休憩体操	9:35～10:15
3 限	10:15～10:55
4 限	11:05～1:45
昼食	11:45～12:20
準備ベル	12:25
昼寝	12:30～1:50
寮から出る時間	13:50
掃除	13:50～14:15
準備	14:15

5 限	14:20～15:00
6 限	15:10～15:50
目の体操	15:50～16:05
7 限	16:05～16:45
8 限	16:55～17:35
夕食	17:35～18:20
3 年生の復習	18:20～19:00
準備	19:05
第一回復習	19:10～19:55
第二回復習	20:05～20:50
名簿の確認	21:10
消灯	21:15

寄宿制生徒 8 人の話によると、学校の統合について、「良くない」と言っている者が多い。理由としては、寄宿生活は苦しい、1 週間学校の外に出ることが許されていない、家族とも連絡が取れない、ホームシックになる、地域の学校があったら地域の学校に通うのが楽しみだった、などである。この学校生活はつまらないと話す学生もいた。故郷にいる時は、遊牧生活に触れることができ、ナーダムに参加できていたが今は参加できていないということである。

寄宿舎の管理人の I 氏は次のように語った。

<事例 9> I 氏（チャブガ第五民族中学校寄宿舎管理人、20 代、女性）

生徒たちは精神的に不安定であるため、学校から逃げるという深刻な問題も発生している。寄宿生活をする中で、伝統的な日常生活から離され、家族から離れることで家庭教育ができなくなっている。生徒は校内から出ることもできない。また、携帯電話などの使用が禁止されているため、家族との連絡ができない状況である。そのため、ホームシックにかかる子供も多い。

このように、学校統合は生徒の日常生活だけでなく、精神状態にも影響を与えたことがわかる。

#### 5.5.6 教諭の仕事の状況

学校統合の政策によって、教諭の数が過剰となったため、一部の教諭が他のポストに回さ

れつつある。例えば、統合前の学校で評判がよかった教諭も、統合後に学校の食堂での調理長や寮の管理人、警備員などの仕事をしている。ここでは、統合前のバヤンウンドゥル中学校で歴史科目を担当していた E 氏が統合後に警備員の職務についた事例を取り上げ、また、他の多くの教諭に行った聞き取り調査の結果から、教諭全体にもたらした影響について述べることにする。

＜事例 10＞E 氏（事例 5 の E 教諭と同一人物、元バヤンウンドゥル中学校歴史教諭、チャブガ第五中学校警備員、40 代、男性、師範専門学校卒）<sup>8</sup>。

2006 年に教諭になる夢が叶い、バヤンウンドゥル中学校で歴史科目の教諭になり、評判がよかった。しかし、2011 年に、バヤンウンドゥル中学校がチャブガ第五民族中学校に統合すると、地元政府の要請で、統合先のチャブガ第五民族中学校に転職させられた。

学校統合により、各科目の教諭の数が多くなり、学校は「教諭の質を高める」目的で教諭の数を調整した。その際、教諭の調整の基準は学歴だった。全学校の教諭が大卒以上であることが求められ、師範専門学校卒の教諭は全員が職員に回された。今は警備員の仕事をしている。

以上は一つの事例だが、E 氏は評判がよかったにもかかわらず統合先の学校で警備員をしている。このように彼らは教諭という肩書きをもちながら、子供たちに授業をすることができなくなっている。

この事例からは、教諭の仕事内容も変化していることが分かる。教諭の質に関しては、学歴だけでなく、民族の文化と歴史を教えるための実践力をもっているかどうかについても考慮する必要がある。

#### 5.5.7 進学試験による成績の変化

表 12 チャブガ第五中学校の進学試験成績レベルの分析 2012 年－2014 年

（出典：チャブガ第五民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。）

2012	科目	中国語	モンゴル語	英語	数学	物理	科学	歴史	政治	総得点	人数
	平均点	105.97	110.18	58.79	55.88	86.004		76.254		493.078	340
	市順位	2	1	2	1	1		2		1	

2013	科目	中国語	モンゴル語	英語	数学	物理	科学	歴史	政治	総得点	人数
------	----	-----	-------	----	----	----	----	----	----	-----	----

	平均点	105.16	109.29	58.68	65.02	80.33	74.3	492.76	491
	市順位	3	1	2	1	2	2	2	

2014	科目	中国語	モンゴル語	英語	数学	物理	科学	歴史	政治	総得点	人数
	平均点	108.93	102.46	72.05	75.76	88.65		73.55		521.4	527
	市順位	3	1	2	1	2		3		3	

3年間の変化	3点	8点	14点	20点	2点上昇	3点下降	30点上昇
平均点	上昇	下降	上昇	上昇			

中学校の進学試験には、中国語、モンゴル語、英語、数学、物理、化学、歴史、政治の8科目がある。その進学試験の点数で、普通の高校と重点高校に分かれる。

チャブガ第五中学校の進学試験成績レベルの分析(2012年－2014年:表12)から見ると、この3年間で、中国語、英語、数学、物理、化学など科目の平均成績が2012年から2014年になると高くなっていることがわかる。その一方、モンゴル語の平均成績が2012年から2014年になると8点低くなっていることがわかる。また、歴史、政治の成績も2012年から2014年になると3点低くなっていることがわかる。この現実から、学校統合政策後、学校が都会に移動したことで、言語の環境が変わり、学生たちのモンゴル語の言語力にマイナスの影響を及ぼしている可能性が考えられる。なお、数は上昇しているが、市の順位は下がっている。

## 第6節 まとめ

### 5.6.1 学校統合に伴う民族小学校の変化

#### ①生徒数と教諭数の変化

統合後のバヤンウンドゥル小学校に通うべき子供たちは620名のはずだったが、151名の生徒は他の都会や近くのソムの学校に移り、生徒数が確実に減った。また、学校統合前のアイル・ガチャの18校の教師は皆民間教師で教師の免許証を待たなくても教室で授業を教えることができた。しかし、統合後のバヤンウンドゥル小学校が教育庁の命令に従い、教師の質の問題という理由で、教師の免許証を持たない前の学校の教諭を雇うことができなかった。そのため、学校の教諭の不足状況が生じた。

#### ②学校の施設の変化

学校統合前に、各アイル・ガチャの学校の施設が不十分だった。18校の15校が教室だけで、体育館などの遊ぶ場所もなかった。バヤンウンドゥルソムの北部の10校の学校では、

電話もなかった。教諭がソムに来ないと何の情報を得られないという状況だった。学校統合に伴い体育館、文化交流室などの施設が増えた。

#### ③民族伝統生活に触れ合う機会

生徒たちが学校統合前には、毎日のように民族伝統生活に触れ合いながら育てた。学校統合後の寄宿制生活により、その機会を失った。

#### ④家庭教育からの離れ

学校統合により、寄宿制生活をする事により、多くの時間を学校で過ごす事になった。家庭で家族という時間は非常に短くなった。従来の家庭での伝統的な教育ができなくなった。

### 5.6.2 学校統合に伴う民族中学校の変化

#### ①使用言語の変化

学校の統合に伴い地域が変わったのは大きな変化である。牧畜地域から漢化した小さな都市に移ったことで生徒たちの日常生活環境と言語環境が変わった。日常生活環境としては、生徒たちが牧畜地域で毎日のように牧畜生活に触れ、伝統的なモンゴル民族の生活をしてきた。都会に移ったことで、伝統的モンゴル生活から切り離された事になった。

#### ②伝統行事への参加の変化

統合前のバヤンウンドゥル中学校では、牧畜地域において毎年行われているナーダム<sup>9</sup>に学校側から積極的に参加していた。しかし現在はナーダムに中学生たちの姿は見られない。毎年のナーダムはモンゴルの子供たちにとって、民族文化を体験し、理解する機会となっていた。また、ナーダムが生徒たちの民族文化に対する好奇心を育み、民族意識を育てることに大きな影響を与え、生徒が楽しく参加することにより民族文化を自然に身に付けることができていた。

チャブガ第五民族中学校では、民族文化を継承させる目的でモンゴルゲルが設置されていた。しかし、ここではゲルの組み立てなどの実習が一回もなく、ドアに鍵をかけて、学校の敷地内に置かれたままである。生徒たちは、周辺の畑で野菜の栽培を行っているが、それはモンゴルの伝統文化とは関係のない活動である。

#### ③生徒の日常生活の変化

学校統合前、バヤンウンドゥル中学校の自宅から通っていた生徒たちは毎日のように牧畜生活に触れていた。統合後のチャブガ第五民族中学校の生徒たちは、毎日、時間割通りに決まったことをし、民族の伝統的な日常生活からは切り離されていたことが分かる。

#### ④教諭の仕事の変化

学校統合後のチャブガ第五民族中学校の教諭たちが教諭という肩書きをもちながら子供たちに授業をすることができなくなっている。また、教諭の仕事内容も変化していることが分かる。教諭の質に関しては、学歴だけでなく、民族の文化と歴史を教えるための実践力をもっているかどうかについても考慮する必要がある。

牧畜地域の小・中民族学校の統合により、全体として、民族の言語で民族教育を受ける生徒数は確実に減少し、家庭教育ができなくなった。民族小学校では、施設が良くなり、教育の質が良くなった。モンゴル民族伝統文化に関する活動と授業を積極的に取り込んでいる。民族中学校では、モンゴル民族の伝統文化体験と民族の歴史を学習する機会が喪失したこと大きな変化である。

## 第六章 赤峰市の都市部における民族教育の現場

### 第1節 都市部のモンゴル民族小・中学校の変遷と地域の特徴

#### 6.1.1 都市部のモンゴル民族小・中学校の変遷

本章では、赤峰市の都市部における民族教育の現場として赤峰モンゴル民族実験小学校と赤峰市モンゴル民族中学校の事例を取り上げる。赤峰市の赤峰市モンゴル民族小・中学校の変遷は以下のようなものである。

赤峰市モンゴル民族実験小学校は1956年に設立され、赤峰市都市部の唯一の民族小学校である。この小学校は、紅山区、松山区、元宝山区のモンゴル民族の子供と12の旗県からの出稼ぎ労働者（牧民、農民を含む）の子供たちに教育する義務を負っている。2011年には、「民族伝統文化教育」の基地であると評価された。

現在の赤峰市民族中学校は、内モンゴル自治区成立後初のウランフ主席を校長に1946年3月1日に設立された。

学校建設当初はモンゴル民族の革命軍の幹部を育てる事を目的としていた。学校名は「内モンゴル自治区高等学校」であった。1949年の中華人民共和国成立までに、モンゴル民族の革命軍の幹部を育てた。1950年に民族中学校に変え、更に学校名を「ジョサト盟中学校」へと変更した。その2年後の1952年に「赤峰市モンゴル民族中学校」と再び名前を変えている。1953年に毛沢東主席から「中華人民共和国の各民族の団結」という題辞が寄せられた。1949年～1966年までの17年間に卒業した生徒は3,790名、そのうち700名が大学に進学できた。1966年から始まり10年間続いた「文化大革命」の時代では「民族問題は階級問題である」とみなされ、民族教育が圧殺された。民族教育を支持したと非難された70%以上の教諭が被害を受け、命を落とした人も少なくない。また、「赤峰市モンゴル民族中学校」、「赤峰市第九小学校」と「回民族学校」の3校を閉校させた。その後、赤峰市の紙製造工場と統合させ名前を「紙製造工場5・7の中学校」とし、モンゴル民族教育を支持した教諭を非難する学校へと変貌させた。「文化大革命」が終わった2年後の1978年から「赤峰市モンゴル民族中学校」が復活し、1980年の進学試験が再スタートとなり、生徒の約70%が大学に進学した。1981年と1983年の進学試験に参加した生徒は100%進学できた。1986年に元のウランフ主席から「赤峰市モンゴル民族中学校」に今後の飛躍を祝う題辞が寄せられた。

赤峰市の都市部では、モンゴル民族小・中学校が一つしかないので、学校統合が行われていない。本論文では、モンゴル民族小・中学校における過去と現状の民族教育を比較し、その変化を明らかにする。

#### 6.1.2 対象地域の特徴

赤峰市の都市部（p30、図 5 参照）の紅山区は赤峰市の政治、経済、文化、交通の中心である。紅山区には、27 の村、53 の住宅地がある。人口 45.6 万人のうち、漢民族が約 74%、モンゴル民族が約 17.8%を占めている。

赤峰市の都市部は比較的経済が発展し、地方より漢化が進んでいる。第二次、第三次産業の従事者は 49.8%を占めており、赤峰部の生徒の親はほとんど、公務員、教師、サラリーマン、あるいは商売などの自営業を営んでいる。そのため、伝統的な遊牧生活から離れ、学生たちは、モンゴル民族の伝統的な年中行事へ参加ができない。

## 第 2 節 赤峰市モンゴル民族実験小学校の過去

赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、21 年間モンゴル語の担当をしている J 氏は次のように語っていた。

<事例 11>J 氏（赤峰市モンゴル民族実験小学校のモンゴル語の担当教諭、50 代、女性）

10 年前と比べると、この小学校の生徒たちのモンゴル語の成績が大きく低下した。読書の時、読めない字が多くなった。作文を書く時の文字、語彙の使い方が下手になった。モンゴル語で話す時、漢語と混ぜて話すのが現状である。

この事例から見ると、都市部の民族小学校では、モンゴル語の能力が低下していることが分かる。

また、赤峰市モンゴル民族実験小学校の教導主任が、モンゴル民族文化の教育について、以下のように語っていた。

<事例 12>K 氏（赤峰市モンゴル民族実験小学校の教導主任、50 代、男性）

2010 年から、教育庁から、モンゴル民族の伝統文化を発展させる目的で資金を積極的に民族学校に投資して活動を行い始めた。その重点を民族小学校に置いた。学校側が投資受けた後、学校内に「民族」などの民族文化に関する科目を設置した。また、「文化交流室」などを設置し、生徒たちにモンゴル文化に触れ合う体験する機会を作った。また、学校の建物もモンゴル民族雰囲気でするようにしている。

この事例から見ると、教育庁から、民族伝統文化を尊重し、発展させることを強調した上で、実際に実施していることが分かる。



### 第3節 赤峰市モンゴル民族実験小学校の現状

#### 6.3.1 調査対象の学校

赤峰市モンゴル民族実験小学校（写真 15）は 1956 年に設立され、赤峰市都市部の唯一の民族小学校である。現在、教師は 84 名、そのうち、モンゴル族 37 名（約 44%）、漢民族 47 名（約 56%）である。生徒数は 710 名、そのうち、モンゴル民族の生徒は 170 名（約 24%）、漢民族の生徒は 540 名（約 76%）である。



写真 15 赤峰市モンゴル民族実験小学校

（出典：2014 年 6 月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。）

#### 6.3.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表 14 に示すように、小学 1 年生の授業はモンゴル語、数学、体育、音楽、美術、品德、手芸、安全、民族の 9 科目がある。モンゴル語は毎日 2 時間で、週当たり 10 時間である。数学は週当たり 8 時間になっている。その他、体育の科目が週 3 時間で、手芸と美術は週 2 時間である。品德、音楽、安全、民族の科目が週当たり 1 時間となっている。

モンゴル民族の文化に関する科目としては、まずモンゴル語がある。毎日 2 時間あり、母語の教育を重視していることが分かる。その他、民族の科目である。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。詳細な内容は後で述べる。

表 14 赤峰市モンゴル民族実験小学校 1 年生の時間割

(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	7:50～8:30	品德	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
2 限	8:40～9:20	数学	数学	数学	数学	数学
3 限	9:50～10:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	体育	モンゴル語
4 限	10:40～11:20	体育	手造り	体育	数学	手造り
5 限	14:40～15:20	モンゴル語	数学	数学	体育	民族
6 限	15:50～16:30	美術	音楽	美術	モンゴル語	安全
7 限	16:40～17:20					

以下の表 15 に示すように、小学 2 年生の授業はモンゴル語、中国語、数学、体育、音楽、美術、品德、手芸、安全、民族の 10 科目がある。モンゴル語は毎日 1～2 時間で、週 9 時間で、週 7 時間になっている。中国語が週 4 時間となっている。その他、体育の科目が週 3 時間で、音楽と美術は週 2 時間である。品德、安全、民族の科目が週 1 時間となっている。

2 年生になると、中国の科目が増える。中国内モンゴルでは、二言語教育は 2 年生から始まっている。中国語の科目が増えるにつれて、モンゴル語の時間が週 1 時間減ることになっている。モンゴル民族に関する科目としては、1 年生と同じくまずモンゴル語がある。その他、民族の科目である。この授業は、モンゴル語の担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。

表 15 赤峰市モンゴル民族実験小学校 2 年生の時間割

(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	7:50～8:30	品德	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	数学
2 限	8:40～9:20	数学	数学	数学	数学	モンゴル語
3 限	9:50～10:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	美術	中国語
4 限	10:40～11:20	モンゴル語	数学	体育	中国語	音楽
5 限	14:40～15:20	音楽	美術	中国語	民族	モンゴル語
6 限	15:50～16:30	体育	中国語	数学	体育	安全
7 限	16:40～17:20					

以下の表 16 に示すように、小学 3 年生の授業はモンゴル語、中国語、英語、数学、体育、音楽、美術、品德、科学、朗読、作文、安全、民族の 13 科目がある。モンゴル語は毎日 1～2 時間で、週 8 時間である。中国語が週 4 時間となっている。英語は週 3 時間となっている。数学は週当たり 6 時間になっている。その他、体育の科目が週当たり 3 時間で、科学と

作文の授業が週当たり 2 時間である。音楽、美術、品德、安全、朗読、民族の科目が週当たり 1 時間となっている。

3 年生になると、英語の科目が増える。中国内モンゴルでは、三言語教育は 3 年生から始まる。英語の科目が増えるにつれて、モンゴル語の時間がさらに週 1 時間減ることになる。モンゴル民族に関する科目としては、2 年生と同様にモンゴル語がある。その他民族の科目があり、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教える。

表 16 赤峰市モンゴル民族実験小学校 3 年生の時間割

(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者記。)

		月	火	水	木	金
1 限	7:50～8:30	品德	数学	モンゴル語	数学	モンゴル語
2 限	8:40～9:20	モンゴル語	モンゴル語	数学	モンゴル語	数学
3 限	9:50～10:30	数学	美術	中国語	数学	音楽
4 限	10:40～11:20	英語	体育	科学	英語	朗読
5 限	14:40～15:20	中国語	英語	体育	民族	モンゴル語
6 限	15:50～16:30	科学	中国語	モンゴル語	中国語	安全
7 限	16:40～17:20	作文	モンゴル語	作文	体育	

### 6.3.3 「民族」及び「朗読」の時間の教育内容の分析

表 14、表 15 を見ると、1 年生、2 年生、3 年生の時間割には、「民族」という科目が週当たり 1 時間となっている。教諭への聞き取り調査によると、この時間で、モンゴル語の担当教諭が『風俗の憧れ』(写真 16) という教科書を用いて、生徒たちに民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を使用し、民族文化に触れ合う体験をしていることが分かった。

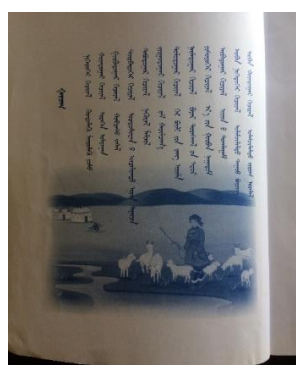
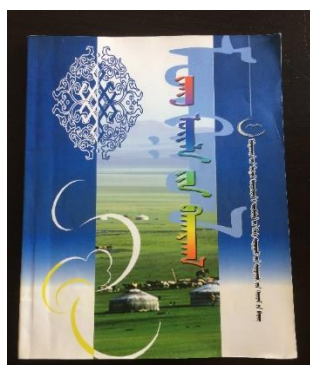


写真 16 『風俗の憧れ』の表紙 『風俗の憧れ』の目次  
(出典：『風俗の憧れ』の編集者のへ氏提供。)

「民族」の授業で、この教科書の内容に沿って、实际的に、挨拶の仕方を演たり、民族文化に触れ合う体験をしているという。例えば、鞍（写真 17）の組み立てとその部分の名前を本物の鞍を用いて、生徒に説明している。

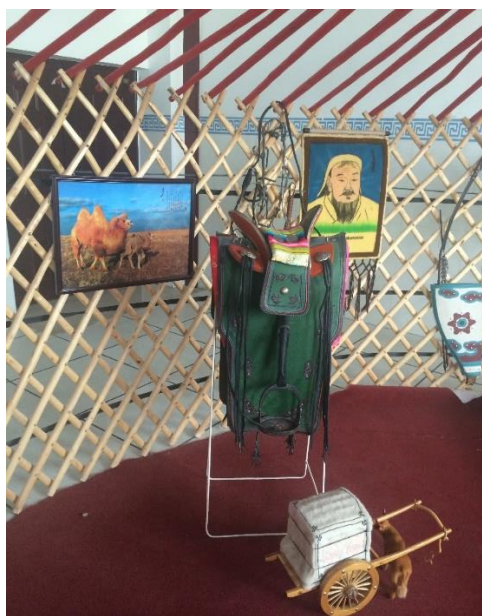


写真 17 モンゴルゲルに展示している鞍

（出典：2014 年 6 月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。）

また、この教科書の編集者の L 氏は次のように語っていた。

<事例 13> L 氏（赤峰市モンゴル民族中学校の元教諭、50 代、男性）

この教科書を編集しようと思ったきっかけは、都市部のモンゴル民族の子供たちに民族の優れた伝統生活習慣（風俗）を学ばせ、モンゴル民族の伝統習慣（風俗）に誇りを持ち、憧れるような愛着をつけるためだ。その内容については、できるだけ、一番身近な民族の伝統日常生活の習慣の挨拶から始まるようにした。モンゴルの子供たちが都会にいても、民族の伝統的な日常生活を維持できるようにしたい。民族の優れた文化を次世代に伝承させたい。

このことからみると、赤峰市モンゴル民族中学校の元教諭の個人の民族的アイデンティティは、非常に強くて、モンゴル民族に誇りを持ち、モンゴル民族の生活習慣に憧れていることが分かる。また、モンゴル人教諭としての責任と義務を果たし、実際にモンゴル民族文化に関する教科書を編集している。

表を見ると、3年から「朗読」の科目が1週間に1時間ある。この「朗読」の科目が、教諭への聞き取り調査から、3年生から6年生まで1週間に1時間あることが分かった。この時間では、『モンゴルの子供の読書』、『モンゴルの歴史と文化の基礎知識』、『モンゴル皇帝らの集会』、『男の三つの遊びの物語』という4冊本(写真18～21)を読むようにしている。この4冊の本もヘシゲバト氏が編集したもので、この小学校が積極的に使用していることが分かった。



写真18 『モンゴルの子供の読書』



写真19 『モンゴルの歴史と文化の基礎知識』

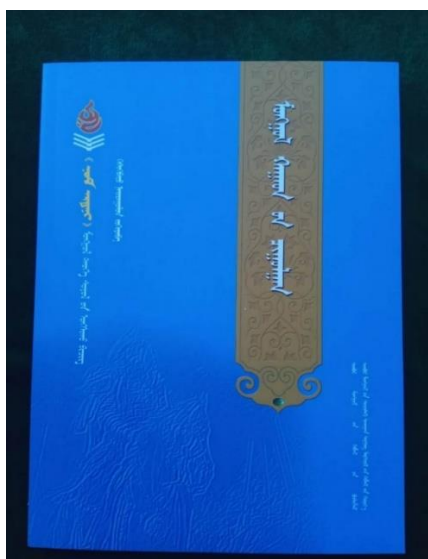


写真20 『モンゴル皇帝らの集会』



写真21 『男の三つの遊びの物語』

(出典:写真18～21まで2014年6月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。)



#### 6.3.4 民族文化の伝統行事への参加状況

赤峰市モンゴル民族実験小学校では、活動としては、清明節に、学校が烈士の碑(写真 22)のまわりの掃除をする活動を組織し、行っている。その説明には中国語を使っている。毎年の5月6日に行う。モンゴル族の生徒と漢族の生徒が共に参加しているため、モンゴル語で説明すると、漢族の生徒が理解できないという理由がある。一方、モンゴル族の生徒が中国語の説明を理解できない人がいないという。



写真 22a 烈士の碑



写真 22b 烈士の名前が刻まれた壁

(出典：ともに 2014 年 6 月、烈士の碑にて筆者撮影。)

この活動の授業の内容から見ると、モンゴル民族の伝統文化に関する内容が見られない。また、活動の内容の説明などを中国語で話していることから見ると、モンゴル語より中国語が社会的に使用されていることが分かる。

#### 6.3.5 生徒たちの日常の生活実態

この小学校では、生徒全員が家から通っている。生徒達は、放課後に迎えに来た保護者と一緒に帰宅する。車で迎えに来る保護者もいれば、自転車で迎えに来る保護者、徒歩で迎えに来る保護者もいる。筆者は放課後の観察で、保護者たちの間の交流はほとんど中国語であったことに気づいた。また、生徒たちも校内から出ると大きな声で中国語だけを話すようになった。

ここでは、保護者 M 氏の子供の日常生活実態についての事例を取り上げ、また、他の多くの保護者に行った聞き取り調査の結果から、都市部の生徒全体の日常生活実態について述べることにする。

<事例 14>M 氏（赤峰市中国銀行会社員 40 代、女性）

私の子供は二年生である。毎朝 6 時半に起きている。7 時までに、朝ご飯を食べて、7 時半までには、学校に送っている。昼は、12 時に迎えに来る。昼ご飯を食べたら、1 時間ぐらいの昼寝をする。その後、14 時半までに、学校までに送る。夕方は、17 時半に迎えに来る。18 時に家に着き、子供が先に宿題をする。宿題は、毎日 1～2 時間もかかる。夕ご飯の後、20 時ぐらいになる。20 時ぐらいから、1 時間ぐらい中国語のアニメを見る。22 時に寝るようにしている。

このように、筆者が保護者へのインタビューで、多くの子供たちが自由時間を中国語のアニメを見ることで使っていることが分かった。

#### 第 4 節 赤峰市モンゴル民族中学校の過去

赤峰市民族中学校に勤めている二人のモンゴル語教師は、学校統合前の赤峰市モンゴル民族中学校で行われていた民族教育について以下のように語った。

<事例 15>N 氏（内モンゴル自治区・赤峰市アルホルチン旗出身、50 代、男性）

私は 1987 年から赤峰市民族中学校に勤め始めた。勤め始めた当初は、赤峰市モンゴル民族中学校は、内モンゴル自治区で一番評判の良いモンゴル民族中学校であった。その時、毎年都市部の子供以外に各旗から優秀な中学生を募集していた。募集する生徒数が一つの旗から 3 人か 4 人だったので、一番良い成績の子供が集まっていた。2000 年まではこのモンゴル民族中学校が内モンゴル地域で成績トップの学校であった。2000 年以降はだんだん成績が落ち、他の旗の優秀な生徒たちも来なくなり始めた。要因は成績が落ちたことだと思う。優秀な生徒数が半分以上減った。都市化が進み、都市部の生徒たちはテレビ、ゲームに目を向け、一生懸命勉強する生徒が減った。特に、モンゴル語の進学試験の成績が全地域で後ろから数えるほどの順位になった。その一方で、中国語と英語の成績は良くなった。

N 氏の語りからみると、1980 年代の時は、赤峰市モンゴル民族中学校は、内モンゴル自治区で一番評判の良いモンゴル民族中学校であったが、都市化の影響を受け、生徒たちが勉強よりも他のゲームなどに目を向け、モンゴル語の能力低下が生じたことがうかがえる。

<事例 16>O 氏（内モンゴル自治区・赤峰市アルホルチン旗出身、40 代、女性）

私は 2003 年にこの学校に異動して来た。その前は牧畜地域のアルホルチン旗の民族中学校で務めていた。前の学校で長い間、モンゴル語の担当だった。都市部の子供と牧畜地域の子供のモンゴル語能力差は大きいと思う。牧畜地域で育っていた子供たちは、毎日民族文化に触れているからモンゴル語の語彙、文字の知識が広い。都市部の子供は、モンゴル民族が日常的に使うものの名前すらわからない子供がたくさんいる。それを一つずつ教えるのは難しいと思う。

O 氏の語りからみると、都市部の子供たちは、特にモンゴル語の語彙、文字とモンゴル民族文化の知識が低いことと、授業の時間を利用して教えることが難しいということで、モンゴル民族の伝統的な日常生活から離され、民族文化に触れ合う機会を失っていることが明らかになった。

## 第 5 節 赤峰市モンゴル民族中学校の現状

### 6.5.1 調査対象の学校

赤峰市モンゴル民族中学校は 1946 年に建設され、内モンゴル自治区の最初の主席（ウランフ）が学長を務める伝統校である。1980 年に内モンゴル自治区の重点中学校に定められ、現在に至っている（写真 23、24）。



写真 23 赤峰市モンゴル民族中学校



写真 24 設立の 1946 年

（出典：ともに 2014 年 6 月、赤峰市モンゴル民族中学校にて、筆者撮影。）

### 6.5.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表 17 に示すように、中学一年の授業はモンゴル語、中国語、数学、英語、地理、



体育、生物、音楽、歴史、美術、政治、情報の12科目がある。モンゴル語、中国語、数学、英語は毎日1時間で、週5時間となっている。歴史は週3時間になっている。その他、地理、体育、生物、政治などの科目が週2時間あり、音楽、美術、情報が週1時間である。その他8限目は自習が3時間と活動1時間となっている。

モンゴル民族の関する科目としては、まずモンゴル語がある。中国語と英語は同じく週当たり5時間であり、三言語が同等に重要視されている。歴史に関しては中国史と世界史の内容が中心で、モンゴルの歴史はわずかである。例えば、教科書は6冊あり、中国史は4冊、世界史は2冊である。中国史4冊で合計763ページあるが、その中にモンゴルに関する内容はわずか6ページである。世界史は2冊で400ページの中に、モンゴルに関する内容は書かれていない。しかし、教科書はモンゴル語で記載された教科書で、他の教科書もモンゴル語表記の教科書である。

表17 赤峰市民族中学校1年生の時間割

(出典：赤峰市モンゴル民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限	8:00～8:40	数学	数学	数学	数学	数学
2限	8:50～9:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
3限	10:15～10:55	歴史	英語	英語	歴史	中国語
4限	11:05～11:45	英語	歴史	政治	自習	英語
5限	14:20～15:00	中国語	中国語	体育	情報	音楽
6限	15:15～15:50	地理	心理	地理	生物	美術
7限	16:05～16:4	政治	生物	中国語	中国語	政治
8限	16:55～17:35	会議	自習	活動	自習	自習

表18に示すように、中学三年生になると7限目は3時間になり、8限目は空いている状態になっている。この学校では二年生になると、物理、化学などの科目が増えることになる。その一方、生徒たちに自由時間を与えることで、生徒たちの成績を上げることを強調している。

『モンゴル民族の歴史』という本について聞くと、生徒たちに配っているが、じっくり教える時間を作ることができないことが事実であることが聞き取り調査からわかった。生徒への聞き取り調査によると、実際に『モンゴル民族の歴史』を読んでいる学生はほとんどいなかった。読みたいと思っても、読む時間がとれないというのが生徒たちの本音である。また、高校進学の実験には「モンゴルの歴史」は出題されないため、世界史と中国史に時間に注力して勉強するという意見が多かった。中学2年生の1週間の時間割は表18の通りである。

表 18 赤峰市民族中学校 2 年生の時間割

(出典：赤峰市モンゴル民族中学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	8:00～8:40	モンゴル語	数学	中国語	数学	モンゴル語
2 限	8:50～9:30	数学	モンゴル語	数学	モンゴル語	数学
3 限	10:15～10:55	物理	中国語	英語	歴史	化学
4 限	11:05～11:45	政治	物理	化学	英語	政治
5 限	14:20～15:00	化学	歴史	政治	中国語	歴史
6 限	15:15～15:50	中国語	体育	物理	化学	物理
7 限	16:05～16:45	英語				英語
8 限	16:55～17:35					

### 6.5.3 「活動」及び「自習」の時間の教育内容の分析

自習という時間が週 3 時間ある。この時間で学生たちは学んだことを自分で勉強している。活動（部活）という時間が週 1 時間ある。学生たちはこの時間を自由に使うことができる。聞き取り調査によると宿題や苦手な分野を復習しているという。

また、3 年生の担当をする P 教諭は次のように語っていた。

〈事例 17〉P 教諭（赤峰市モンゴル民族中学校のモンゴル語の教諭、50 代、男性）

この学校では、「活動」の時間と「自習」の時間を生徒たちが自由に使えるようにしている。都市部の学校は、地方の学校より進学試験の競争が激しいため、「活動」の時間と「自習」時間に、他の活動をしていると学習についていけない状況が出てくる。もちろん、民族文化に関する活動を行いたい気持ちはありますが学習を優先している。

このことからみると、都市部の民族学校では、民族文化の教育が欠如していることがわかる。

### 6.5.4 民族文化の伝統行事への参加状況

この学校は、学校内での民族文化を発展させる目的で校内の施設や設備として以下のよう、相撲場（写真 25）、モンゴルゲル（写真 26）などを設置している。



写真 25 相撲場



写真 26 モンゴルゲル

(出典：ともに 2014 年 6 月、赤峰市モンゴル民族中学校にて、筆者撮影。)

写真 12 のように、この学校は設立されてから 69 年たっているが、2011 年に初めてこのブヘノタラボル（相撲場というモンゴル語）という字が書かれた大きな石が置かれることになった。この目的は学生たちにモンゴル相撲について学ばせ、モンゴル民族の相撲を永遠に継承させることであるとモンゴル語の担当の教諭が語った。しかし、この場所では相撲を取っていない。聞き取り調査で生徒たちに「相撲はどこで開催するのですか」と聞くと、「そこ」と石を指すことに疑問を持った。「では、『そこ』で相撲をやったことはありますか」という質問に対しては、「ない」と答えた。

今回の見学を通じて、この相撲と書かれた石が本来の生活の中での相撲文化と関わりがないことがわかった。遊牧生活の中での相撲というのはモンゴル伝統の徒手格闘技である。ブフと呼ばれ、国技として大変人気を集めている。約 2,500 年の歴史をもち、かつてチンギスハンも愛好したと言われる。日本の相撲と技の共通点も多く、その源流という説もある。ブフは遊牧生活の中で馴染み、主にモンゴル民族のナードムなどで牧民と子供たちが集まり、やることが多い。この学内「相撲場」はその名前だけを書いた石を置いただけで周りに草が生えても何も手入れしていない。

写真 26 は、都市部の学校の校舎の正面に設置されているモンゴルゲルである。ここでは、ゲルの組み立てなどの実習をするのではなく、夕方お腹をすかした生徒たちにチョコレートなどを販売するスペースとして利用されている。

#### 6.5.5 生徒たちの日常の寄宿生活実態

この中学校では 148 名の学生のうち、約 25%の学生が自宅から通い、約 60%の学生が学校の寮に住んでいる。寮に住んでいる学生は放課後、学校の食堂で食事をし、その後は学校の自習時間を過ごし、教室で授業の復習をする。教師は交替で実習指導の担当をする。自宅から通う学生は、放課後は自宅に戻り、家で食事をした後、宿題を終わらせ、テレビを見る。この学校の生徒の親はほとんどが公務員、教師、サラリーマンである。あるいは、牧畜地域

から都市に移った家族は商売といった自営業を営んでいることが多い。

## 第6節 まとめ

### 6.6.1 都市部の小学校の変化

ここでは、赤峰市モンゴル民族実験小学校の過去と現状を比較し、その変化についてまとめる。

第一に地域の特徴からみると、都市部の生徒は、学校内外の日常的な生活の言語環境はほとんど漢語で、日常的に触れ合うゲームなども漢語を使うようになったことである。社会の使用言語もほとんど漢語である。モンゴル語能力が低下したことで、モンゴル語の語彙、文字の喪失につながっている。

第二に、「二・三言語教育」により、モンゴル語の授業数が減っている。日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失である。伝統的な民族文化と触れ合う日常生活から切り離されたことで、モンゴル語の授業を理解しにくくなり、特に、民族習慣、遊牧生活に関する文字、語彙を理解できなくなった。

第三に、モンゴル民族文化、民族生活習慣に関する教育と実際に触れ合う機会を作っている。例えば、モンゴル語の担当教諭が『風俗の憧れ』という教科書を用いて、生徒たちに民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を使用し、触れ合う体験をしていることがある。

第四に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちはモンゴル民族の伝統行事への参加がほとんどできなくなったことである。逆に、漢民族と同じように祝っている。

第五に、モンゴル文化に興味を持つモンゴルの知識人たちが、モンゴル民族の伝統文化が重視され、民族教育現場で自分の貢献活動を行っている。

### 6.6.2 都市部の中学校の変化

ここでは、赤峰市モンゴル民族中学校の変化についてまとめる。

まず、O氏とP氏の語りから分かることは、都市部の生徒たちがモンゴル民族の伝統的な日常生活から離れ、民族文化に触れ合う機会を失ったことで民族文化、モンゴル語の語彙、文字の喪失に繋がっている。

次に、時間割の分析から分かることは、都市部では『モンゴル民族の歴史』という教科書が配布されていたが授業では使われていない。また、生徒たちもほとんど読まれてない。都市部における民族中学校では、8限目は実習時間が3時間と活動時間が1時間となっている。この時間には、学生たちが自分の苦手な科目の勉強をしているという。このことから、都市部のモンゴル民族中学校では、「活動」の時間に民族文化、民族歴史に関する活動と教

育が行われなくなったことが分かる。

最後に、都市部における民族中学校では祝日は漢民族と同じく、お祝いや、ナーダムなどの民族伝統行事に参加しなくなったことが分かる。

## 第七章 赤峰市の農耕地域における民族教育の現場

### 第1節 オロインスムモンゴル民族中心小学校の変遷

本章では、赤峰市の農耕地域における民族教育の現場としてオーハン旗の学校統合前後のオロインスムモンゴル民族中心小学校の事例を取り上げる。この農耕地域オロインスムでは、以前から今日にいたるまで、民族中学校が成立されなかった。なぜ、民族中学校が設立されなかったのか。その背景には、この地域では漢民族の人口の割合が高く、漢化が進んでいる。その影響を受け、モンゴルの保護者たちの子供の学校の選択の価値観が変わった。子供を民族学校に送るより漢語学校に送った方が、将来が就職するのにメリットがあると考え保護者が増え、子供を漢語小学校に送った。そのことにより、モンゴル民族小学校に通う生徒数が減少した。漢語小学校に通う子供が卒業した後、この地域の漢語中学校に入学することになっている。また、現地調査で、モンゴル民族小学校でも、17年間、モンゴル語で授業を受けるクラスが停止されていたことが分かった。この状況の中で、政府は、モンゴル民族中学校を成立させる必要性が低いと判断し、モンゴル民族中学校を設立されなかった。

本論文では、このオーハン旗を農耕地域と分類している。オーハン旗のオロインスムモンゴル民族中心小学校の変遷は以下の通りである。

調査対象学校であるオロインスムモンゴル民族中心小学校の前身は1937年に孔祥国が阳高庙寺院にて設立した「私学堂」である。当初の生徒数は23名だった。1942年に日本教育が始まり、寺院の主人である菅子という人が学校を作り、五つの校舎、七つのクラスを設け、赵月、达木林扎布、孔祥国の3人を教師として集めた。1947年には、ウーハン旗が解放され、人民政府から李永安という人を派遣し、学校を設立した。二つのクラスがあり、モンゴル語で授業を受けていた。生徒数は37名であった。この地域で、モンゴル人の子供たちが初めて学校に入ることができた。

1950年にこの学校を阳高庙小学校と名付け、李炳章が最初の学長になった。教師は鲁国康、鲍练成の二人がいた。この年から漢語を教え始めた。1960年に、この学校が公立学校に変えられ、モンゴル語で授業を受けるクラスと漢語で授業を受けるクラスに二分された。全部で8のクラスがあり、教師14名、生徒は184名でだった。1965年に荷叶勿苏初級牧業中学校となり、鲍凤珊が代理校長になった。その後、10クラス、生徒は294名まで増加した。1994年9月からモンゴル語で授業を受けるクラスを停止し、中国語だけで授業を受けるクラスへと改変した。その時期からこの農耕地域のモンゴル民族の子供たちが自分の母語で勉強するチャンスを奪われ、モンゴル民族の文化、文字を失う危機に陥った。1999年9月8日「一郷一校」が始まり、寄宿制が始まった。6つのガチャの学校を合併させた。生徒は368名、そのうち、寄宿生は125名だった。2000年9月1日から三言語教育が始まった。

## 第2節 オロインスムモンゴル民族中心小学校の事例

### 7.2.1 対象地域の特徴

オーハン旗（p30、図5参照）は、赤峰市の東南部に位置し、その面積は約8,316平方キロメートルである。農業を主として農業と牧業を結合したウーハン旗は、赤峰市の各旗・県のうちモンゴル族の人口とその割合が一番少ない旗である。この旗は、22の郷・6つの鎮・1つのソムを有しており、16の民族、58万3,629人が居住している。その内、モンゴル族は2万8,271人（4.8%）、漢族は54万7,111（93.7%）人である（温都日娜2007：28）。

### 7.2.2 統合前のオロインスムモンゴル民族中心小学校

モンゴル語で授業を受けるクラスの復活前のオロインスムモンゴル民族中心小学校の状況について、教務主任のQ教諭、R保護者とS氏は以下のように語っている。

#### <事例18>Q教諭（オロインスムモンゴル民族中心小学校の教諭、30代、女性）

1997年に、私はこの学校を卒業している。その時は、生徒は約400名であった。当時、実家の家族はみな日常的にモンゴル語で交流し、中国語よりモンゴル語が堪能であった。私のクラスには生徒が37名いて、ほとんどの生徒はモンゴル語が上手だった。一年生と二年生の時は、多くの生徒は、授業中の中国語が分からなくて困った。三年生の時からやっと授業の内容がわかるようになった。その時の生徒たちは、小学校の時から中国語で授業を受けるクラスだったので、中学校、高校、大学も実家から遠く離れた都市の中国語で授業を受けるクラスへと進学した。私は、師範大学を卒業した後、故郷に戻って、教師になった。現在、中国語で授業を受ける3クラスの中国語の担当もしている。

Q教諭の話からは、幼い頃からモンゴル語が上手だった子供たちは、中国語で授業を受けることにより、だんだん中国語が上手になり、モンゴル語を話さなくなっていることが明らかになった。

#### <事例19>R保護者（中国語で授業を受けるクラスの生徒の父、50代、男性）

私の息子は1995年に、オロインスムモンゴル民族中心小学校に入学した。元々はモンゴル語で授業を受けるクラスに通わせるつもりだった。学校側に意見を提言したが他の選択がないと言われた。子供も小さいから、実家から離れたモンゴル民族学校まで

送れなかった。子供をモンゴル語で教育させなかったことを、現在も後悔している。息子は大学を卒業しているが、モンゴル語をほとんど話せなくなっている。その結果、漢民族の女性と結婚している。

R 氏の話からは、当時の保護者たちのモンゴル語で授業を受けるクラスをなくしたことに對して反対していた状況が分かる。

＜事例 20＞S 氏（オーハン旗、オロインスムソムの農民、60 代、男性）

1994 年から 2011 年までの 17 年間モンゴル語で授業を受けるクラスが停止されたことはとても残念である。この間のモンゴル民族の子供たちは、モンゴルの言葉で話せなくなった。モンゴル民族の伝統的な文化から離れ、漢民族の女性と結婚するケースが多い。モンゴル語で授業を受けるクラスを復活させたことは民族を救うことである。

S 氏の話からは、モンゴル語で授業を受けるクラスをなくした 17 年間の効果が分かる。モンゴル語を話さなくなり、結婚相手に中国語を話せる人を選ぶという状況な問題が起こったことが分かる。

教務主任の Q 教諭、R 保護者と S 氏の話から、モンゴル語で授業を受けるクラスをなくした当時の状況、保護者の思いやその成果が分かる。

### 第 3 節 学校統合後のオロインスムモンゴル民族中心小学校

#### 7.3.1 対象地域の学校

オロインスムモンゴル民族中心小学校はオーハン旗の唯一の民族小学校である。2011 年から校長楊氏の指導の下でこの学校のモンゴル語で授業を受けるクラスが復活した。表 19 は、復活の後の 2011 年～2017 年の間のモンゴル語で授業を受けるクラスの生徒数と中国語で授業を受けるクラスの生徒数である。この学校 141 名生徒全員がモンゴル民族である。2011 年までは、モンゴル民族でありながら、モンゴル語で授業を受けることができない状態であった。

表 19 を見ると、オロインスムモンゴル民族中心小学校では、モンゴル語で授業を受けるクラスと中国語で授業を受けるクラスと二つに分かれている。モンゴル語で授業を受ける幼稚園の子供は 14 名、漢語で授業を受ける子供 12 名いる。幼稚園の子供を含めて全学校の人数は 141 名で、寄宿生は 115 名、通学生は 26 名である。そのうち、モンゴル語で授業を受けるクラスの生徒は 47 名、中国語で授業を受けるクラスの生徒は 75 名である。



表 19 復活後の 2011 年～2017 年の間の生徒数

(出典：オロインスム民族中心小学校提供のモンゴル語資料に基づき筆者作成。)

学級 モンゴル語 で授業を受 けるクラス	生徒数	寄宿生	通学生	学級 中国語で授 業を受ける クラス	生徒数	寄宿生	通学生
幼稚園	14			幼稚園	12		
一年生	5	5		一年生	9	8	1
二年生	6	6		二年生	11	10	1
三年生	6	5	1	三年生	8	5	3
四年生	8	6	2	四年生	19	15	4
五年生	5	5		五年生	8	8	
六年生	3	3		六年生	8	8	

本学校の校門（写真 27）にはモンゴル語と中国語で書かれた学校の名前の看板が建てられている。内モンゴル自治区のほかの施設と表示方法<sup>10</sup>が同じである。しかし、構内に入っていると本小学校の建物と構内の施設は訪問者の目を引くような特別なモンゴルの雰囲気



写真 27a、b オロインスムモンゴル民族中心学校

(出典：ともに 2015 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。)

教育棟（写真 28）は、モンゴル民族の伝統的な住まいのモンゴルゲルの形をしている。その正面の壁にウルジジャンガというモンゴル民族の伝統的な模様が描かれている。その色は、モンゴル民族が神聖な色と尊ぶ白色と青色である。また、構内の右側の壁の絵（写真 29）には、モンゴルゲル、モンゴル相撲などが描かれている。左側の壁の絵（写真 30）には、モンゴルゲルの前でモンゴルの伝統的な客様迎える時の儀礼を行う時の様子が描かれている。



写真 28 オロイスムモンゴル民族中心学校の教育棟

（出典：2015 年 6 月、オルンスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。）



写真 29 迎客時の儀礼

（出典：2015 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。）

本小学校では、教室棟が二棟あり、その中に教室があり、その教室棟の廊下にも、絵あるいは、写真が揚げられている（写真 30、写真 31）。



写真 30 日常的な遊牧生活が描かれた壁

(出典：2015 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。)



写真 31 2 年生の授業を受ける生徒たち

(出典：2015 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。)

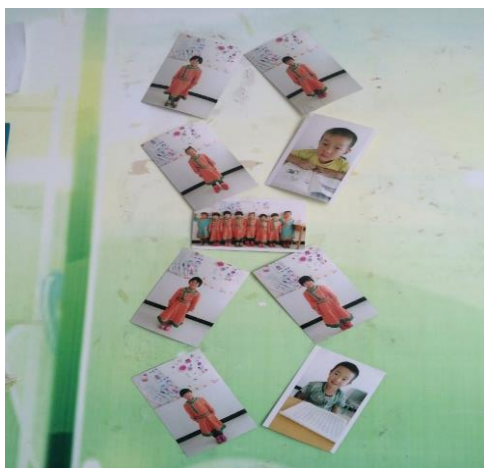


写真 32 教室の壁に張られた生徒の写真

(出典：2015 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心学校にて、筆者撮影。)

### 7.3.2 時間割と各教科の時間数の分析

以下（表 20、表 21、表 22、表 23、表 24、表 25）はオーハン旗のオルンスムモンゴル民族中心学校のモンゴル語で授業を受けるクラスの 1 年生から 3 生の課程表と時間割である。課程表には、1 週間の授業の内容が書かれている。時間割には、生徒たちの 1 日の活動の流れが書かれている。

以下の表 20 に示すように 1 年生の授業はモンゴル語、数学、音楽、美術、体育、会議、科学、品德、校課、活動、安全、手芸、サッカー、書道の 14 の科目ある。モンゴル語は 1 週間に 7 時間である。活動は 1 週間に 6 時間である。その他、音楽と体育、品德と美術の科目は 1 週間に 2 時間で、会議と校課、手芸が 1 週間に 1 時間である。表 11、表 12、表 13、表 14、表 15、表 16 をみると、1 年生から 3 年生までの 1 週間 2 時間の体育の授業の以外に「サッカー」の授業が 1 時間あることがわかる。

表 20 モンゴル語で授業を受けるクラスの 1 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	8:00～8:40	音楽	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
2 限	8:50～9:30	会議	数学	数学	数学	数学
3 限	10:10～10:50	品德	モンゴル語	サッカー	品德	活動
4 限	11:00～11:40	体育	活動	活動	体育	モンゴル語
5 限	2:30～3:10	書道	体育	モンゴル語	活動	校課
6 限	3:20～4:00	活動	音楽	美術	モンゴル語	安全
7 限	4:10～4:50	数学	美術	活動	活動	手芸

以下の表 21 に示すように、2 年生になると中国語を学び始める。1 週間に 3 時間である。表 21、表 22、表 23、表 24 を見ると 2 年生から 6 年生までに、中国語が 1 週間に 3 時間である。モンゴル語は 1 年生から 3 年生までは 1 週間に 7 時間であり、4 年生から 6 年生までは、1 週間に 6 時間である。

表 21 モンゴル語で授業を受けるクラスの 2 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	8:00～8:40	音楽	数学	数学	数学	数学
2 限	8:50～9:30	会議	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
3 限	10:10～10:50	中国語	数学	サッカー	モンゴル語	品德
4 限	11:00～11:40	体育	活動	校課	体育	中国語
5 限	2:30～3:10	美術	体育	朗読	活動	モンゴル語
6 限	3:20～4:00	活動	モンゴル語	中国語	美術	安全
7 限	4:10～4:50	モンゴル語	書道	活動	品德	手芸

以下の表 22 に示すように 3 年生から英語を学び始める。1 週間に 3 時間である。表 22、表 23、表 25 をみると、3 年生から 6 年生までに英語は 1 週間に 3 時間である。

表 22 モンゴル語で授業を受けるクラスの 3 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1 限	8:00～8:40	音楽	数学	数学	数学	数学
2 限	8:50～9:30	会議	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
3 限	10:10～10:50	中国語	中国語	英語	美術	科学
4 限	11:00～11:40	モンゴル語	英語	美術	探求	サッカー
5 限	2:30～3:10	体育	科学	体育	中国語	モンゴル語
6 限	3:20～4:00	品德	音楽	書道	英語	安全
7 限	4:10～4:50	数学	品德	朗読	モンゴル語	手芸

以下表 23、表 24、表 25 は、オーハン旗のオロインスムモンゴル民族中心学校の中国語で授業を受けるクラスの 1 年生から 3 生の課程表と時間割りである。課程表には、1 週間の授業の内容が書かれている。時間割りには、生徒たちの 1 日の活動の流れが書かれている。

表 23 をみると、中国語で授業を受けるクラスの 1 年生で中国語が 1 週間に 7 時間となっている。モンゴル語の科目は見られない。表 8 をみるとモンゴル語が 1 週間 3 時間となっ



ている。表 20、表 21、表 22 をみると、2 年生から 6 年生までモンゴル語の授業が 1 週間 3 時間となっている。

表 23 中国語で授業を受けるクラスの 1 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	音楽	中国語	中国語	中国語	中国語
2 限	会議	数学	数学	数学	数学
3 限	体育	書道	品德	体育	活動
4 限	美術	中国語	活動	中国語	中国語
5 限	品德	体育	サッカー	活動	校課
6 限	活動	中国語	音楽	美術	安全
7 限	数学	閲読	活動	活動	手造り

表 24 中国語で授業を受けるクラスの 2 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	音楽	数学	数学	数学	数学
2 限	会議	中国語	中国語	中国語	中国語
3 限	体育	中国語	モンゴル語	体育	品德
4 限	中国語	モンゴル語	活動	中国語	校課
5 限	活動	体育	サッカー	活動	モンゴル語
6 限	数学	美術	音楽	美術	安全
7 限	書道	閲読	活動	品德	手造り

表 25 中国語で授業を受けるクラスの 3 年生の課程表

(出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	音楽	数学	数学	数学	数学
2 限	会議	中国語	中国語	中国語	中国語
3 限	数学	英語	科学	中国語	研修
4 限	科学	モンゴル語	サッカー	英語	美術
5 限	体育	読む	モンゴル語	体育	中国語
6 限	英語	美術	音楽	品德	安全
7 限	中国語	書道	品德	モンゴル語	手造り

### 7.3.3 生徒たちの日常寄宿生活実態

表 26 をみると、本学の寄宿制生徒たちの 1 日の流れが分かる。寄宿生活をしている生徒たちは、5 時 30 分に起床、体操、自習、朝食を済ませて、8 時から 1 限の授業が始まる。午前中は 4 つの授業がある。1 時限の授業時間は 40 分である。2 限目と 3 限目の間に 30 分の視力低下を予報するための目の体操がある。昼食の時間は 40 分で、昼寝の時間は 1 時間 40 分である。中国では、職場は日本と比べて、昼休みが長く、昼休みは家に帰って食事をするのが一般的である。また、中国では、冬と夏の休み時間が変わり、夏は昼寝の時間が設けられる。午後には、3 つの授業がある。5 時から朗読の時間が 40 分ある。その後、夕食の時間 1 時間と 40 分の復習時間が 2 回あり、8 時 30 分に就寝となっている。家から通う生徒は、午前中は、1 限から 4 限の授業を終わらせたら、昼は帰宅する。その時、保護者が、迎えに来る人もいれば、自転車か徒歩で帰る人もいる。生徒たちが、教室外で活動できるのは、朝の体操（5:50～6:20）だけになっている。

表 26 寄宿生徒たちの 1 日の流れ

（出典：オロインスムモンゴル民族中心小学校提供のモンゴル語資料に基づき筆者作成。）

起床	5:30	昼寝	12:30～14:10
体操	5:50～6:20	予備	14:20～14:30
自習	6:20～7:00	5限	14:30～15:10
朝食	7:00～7:50	6限	15:20～16:00
予備	7:50～8:00	7限	16:10～17:50
1限	8:00～8:40	朗読	17:00～17:40
2限	8:50～9:30	夕食	17:40～18:40
目の体操	9:30～10:10	復習 1	18:40～19:20
3限	10:10～10:50	復習 2	19:30～20:10
4限	11:00～11:40	寝る	20:30
昼食	11:40～12:20		

寄宿生の日常生活について、寄宿舎の管理人は次のように話す。

<事例 21>T 氏（オロインスムモンゴル民族中心小学校の寄宿舎管理人、20 代、女性）

生徒たちのうち、日常的に中国語で話す者は 80%以上であると思う。私たちもモンゴル語で話すようにしているが、中国語で授業を受けるクラスの生徒に、モンゴル語で話しても、理解できない子が増えていて、中国語で話すしかない時が多くなった。一緒

に集団生活しているので、どうしても中国語で話すことを止めることもできない。学校側、教諭たちもこのことを心配しているが、良い結果がないままである。

このようにモンゴル民族小学校の中で、二つの言葉で授業を受けるクラスがあることも互いに影響を与えていることが分かる。

モンゴル語の担当の教諭は、生徒たちのモンゴル語の成績について次のように話す。

<事例 22>U 氏（オロインスムモンゴル民族中心小学校のモンゴル語の教諭、30 代、女性）

生徒たちは、モンゴル語の授業中に中国語で話す時がある。授業中は中国語で話すことを中止している。中国語を話したら、歌を歌うなどの刑罰を与えられるようにしている。生徒の人数は少ないので、一人一人にしっかり教えることができる。できる限り、教室の外でもモンゴル語で話すようにしている。

このように、教諭たちも積極的にモンゴル語の教育のために力を入れていることが分かる。

#### 7.3.4 民族文化の伝統行事への参加状況

オロインスムモンゴル民族中心小学校では、民族文化を継承させる目的で学校側から積極的に、他の地方から馬頭琴の有名な教師を招いていた。この教師は、主に、生徒たちに馬頭琴とモンゴルの民族の踊り（写真 33）を教える。「活動」の時間を用いて、興味を待っている生徒が任意で参加できる。参加生徒は、主にモンゴル語で授業を受けるクラスの生徒であった。



写真 33 生徒たちの踊り

（出典：2014 年 6 月、オロインスムモンゴル民族中心小学校にて、ア氏撮影。）



## 第4節 まとめ

### 7.4.1 学校統合による小学校の変化

まず、この学校では、モンゴル語で授業を受けるクラスと中国語で授業を受けるクラスの二つに分かれていたが、1994年9月からモンゴル語で授業を受けるクラスを停止し、中国語だけで授業を受けるクラスへと変化させたことが一番大きな変化であると言える。このことにより、17年間自分の母語で勉強できなくなった。これは、モンゴル民族教育を中国語教育に融合させたことと同義である。

次に、2011年のモンゴル語で授業を受けるクラスを復活させたという変化がある。これにより、自民族の言葉を取り戻し、自分民族の伝統文化、生活習慣を育て、次の時代に伝承させる可能性を作った。

最後に、民族文化を継承させる目的、で学校側から積極的に、他の地方から馬頭琴の有名な教師を招いたことである。この活動は、モンゴル民族の子供たちに伝統文化を継承させる実地的な試みであると言える。

## 第八章 考察と結論

本論文では、中国内モンゴル自治区における学校統合に伴う民族教育の変容を明らかにし、その変化が民族教育に対してどのような影響をもたらしたかについて、現地調査に基づき考察した。

民族教育の変化をとらえる指標として、これまで、民族学校数、民族語で教育を受ける生徒数の減少という量的変化が注目されてきた。アルホルチン旗における民族中学校の学校数は、2006年以前の13校から、2006年には8校に、そして2011年には2校に減少した。これは、大規模な統合ではあるが、計算上は民族語で民族文化の教育を受ける生徒数は変わらないはずであった。しかしながら、経済的な理由や都市化された地域で親元を離れた寄宿舎生活をする環境の変化などに慣れることができず不登校となる生徒が増えた。すなわち、民族の言語で民族文化の教育を受ける生徒数は、統合により確実に減少していた。

しかし、本調査で最も注目した点は量的な変化よりもむしろ質的な変化である。本論文では、学校統合に伴う民族教育の変化を次の5点に焦点を当て、考察した。①モンゴル語能力の低下、②モンゴル民族の歴史を学習する機会の喪失、③民族文化の伝統行事への参加の減少、④日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失、⑤家庭教育の喪失。

民族教育の変化を牧畜地域、都市部、農耕地域という三つの地域の教育現場に分類して現地調査を行った。本論文の結論として、三つの教育現場を比較し、その共通点と相違点について考察する。

### 第1節 結果のまとめ

#### 8.1.1 牧畜地域の教育現場

牧畜地域の教育現場では、第一に、生徒たちが日常生活（衣、食、住、言語、生活習慣）において民族文化から離れ、農村や都市部の影響を受けたことが大きな変化である。学校統合前は、民族文化の重要な部分である牧畜生活の中で日常的にモンゴル語を話し、牧畜生活に密着したモンゴル語と文字、語彙が自然に身に付けられていた。しかし、学校統合後は、漢化が進んだチャブガの周辺で話される言語がほぼ漢語になっている。これは、モンゴル語とモンゴル文字、語彙の喪失に繋がっていると言える。このため、生徒たちのモンゴル語の能力が低下した。

第二に、学校が実家から遠く離れたことで、不登校の生徒の数が増えた上に家庭教育ができなくなった。また統合前は、自宅から通う生徒たちを地域の人々が見守りながら社会的なしつけを行っていた。しかし、閉鎖的な寄宿舎生活では社会への参加ができなくなっている。

家族から離れ、家族から受ける家庭教育の機会を失うことで、学校での学習ができて、モンゴル人としての伝統的モラルや礼儀作法の認識が低下している。

第三に、学校統合前は、ナーダムなどの民族文化体験が生徒たちの民族文化に対する関心を育み、民族意識を高めることに大きな影響を与えていたが、学校統合により、生徒たちが牧畜地域の実家から遠く離れ、寄宿舎で生活せざるを得なくなった。寄宿生活により、日常生活の中で触れていた牧畜文化に接する機会が失われ、民族生活や文化体験の機会も失われている。これにより生徒たちの民族意識が低下していると考えられる。

第四に、学校統合により、教諭が過剰になった。民族の歴史や伝統文化を教える教諭よりも、「大学卒業」という学歴のみを重視した教員配置が進められ、モンゴル民族の歴史を教える教諭が教壇から追われた。また、統合前には民族の歴史を教えていた「活動」の時間の内容が、野菜栽培やサッカーに変わり、民族の歴史を自習していた「朗読」の時間が、進学準備のための補習の時間に変わった。それにより、民族の歴史を学ぶ機会を失った。

#### 8.1.2 都市部の教育現場

都市部の教育現場では、第一に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちのモンゴル語の能力低下が、大きな変化としてあげられる。生徒たちは都市化の影響を受け、日常的な生活の言語環境はほとんど漢語となり、日常的に触れ合うゲームなども漢語を使うようになった。モンゴル語能力が低下したことで、モンゴル語の語彙、文字の喪失に繋がった。

第二に、日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失である。伝統的な民族文化と触れ合う日常生活から切り離されたことで、モンゴル語の授業を理解しにくくなり、特に、民族習慣、遊牧生活に関する語彙を理解できなくなった。

第三に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちはモンゴル民族の伝統行事への参加がほとんどできなくなった。ナーダムなどの民族文化体験が生徒たちの民族文化に対する関心を育み、民族意識を高めることに大きな影響を与えていた。民族生活や文化体験の機会が失われることにより、生徒たちの民族意識が低下した。

#### 8.1.3 農耕地域の教育現場

農耕地域の教育現場では、第一に、モンゴル民族の子供たちが自分の母語で勉強できなくなったことが、民族の言葉の喪失に繋がった。従って、本来の「それぞれの民族が自らの言語や文化を維持するために行う教育である」という民族教育の目的を果たすことができなくなっている。

第二に、民族の言語だけではなく、モンゴル民族の伝統文化、生活習慣、伝統行事から切り離されることとなり、「民族的マイノリティの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育は重要な要素である」という民族教育の役割を果たせなくな

っている。民族教育にとって危機であり、モンゴル民族教育が中国語教育に融合されたことになる。

第三に、2010 年に、農耕地域では、モンゴル語で授業を受けるクラスの復活があったことは、民族教育の発展に繋がる大きな出来事である。

## 第2節 牧畜地域、都市部、農耕地域の民族教育の比較

牧畜地域、都市部、農耕地域の民族小学校における民族教育の比較を行う。

表 27 に示すように、時間割におけるモンゴル語の授業の数は周に、牧畜地域では 8 時間、都市部では、10 時間、農耕地域では 7 時間となっている。モンゴル語の時間割の分析からみると、都市部の民族小学校では、モンゴル語の教育をもっとも重視していることが分かる。

牧畜地域では、「故郷」や「担当」の授業は週 1 時間と 3 時間となっている。「故郷」の時間を用いて、生徒たちの作ったモンゴル民族の伝統的工芸品を『モンゴル文化交流室』で、展示し、モンゴル民族伝統文化に触れ合う体験をしている。また、1 学期に 4 回、「担当」の授業を用いて、モンゴル民族伝統文化の専門家を招いて、授業をしている。都市部では、「民族」と「朗読」の授業が週 1 時間となっている。『風俗の憧れ』という教科書を用いて、生徒たちに民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を利用し、触れ合う体験をしている。また、「朗読」の時間を用いて、『モンゴル子供の読書』、『モンゴル歴史と文化の基礎知識』、『モンゴル皇帝らの盟会』、『男の三つの遊びの物語』という 4 つの本を読むようにしている。農耕地域では、「活動」時間は週 5 時間となっている。「活動」の時間では、民族舞踊、馬頭琴の演奏を教えている。

この 3 校の学校外における民族教育を比較すると相違点がある。牧畜地域における民族教育学校では、モンゴル民族の伝統的なナードムに積極的に参加している。都市部における民族小学校では祝日は漢族と同様に祝い、民族伝統文化的な活動は行われていない。ナードムへの参加もあまりみられない。農耕地域の小学校でも、モンゴル民族の伝統的な行事への参加がないことが分かった。

表 27 牧畜地域、農耕地域、都市部の民族小学校における民族教育の比較

(出典：現地調査の結果に基づき筆者作成。)

比較対象地域	牧畜地域	都市部	農耕地域
授業における民族教育の時間割	モンゴル語の授業は週 8 時間である。 「故郷」や「担当」の授業で、民族伝統文化に触れ合う体験をしている。	モンゴル語の授業は週 10 時間である。 「民族」と「朗読」の授業で、民族伝統文化に触れ合う体験をしている。	モンゴル語の授業は週 7 時間である。 「活動」の時間で、民族舞踊、馬頭琴の演奏を教えている。

民族の歴史	4回の授業中に民族の歴史の内容の説明がある。	「朗読」の時間を用いて、モンゴル民族の歴史の本を読んでいる。	民族の歴史についての教育は行われていない。
授業以外の民族教育活動	民族舞踊・馬頭琴の演奏・ナーダムへの参加。	校内にモンゴルゲルの展示。	民族舞踊・民謡・馬頭琴の演奏。
親の職業	牧畜業従事者は全労働人口の約86.8%を占めている。	第二次第三次産業の従事者は約49.8%を占めている。	農業従事者は全労働人口の約70%を占める。
教師の出身地	牧畜地方出身が約91%を占める。	都市部出身が約83%を占める。	牧畜地域出身が約90%を占める。

牧畜地域と都市部の民族中学校における民族教育比較は、表28に示すように、時間割におけるモンゴル語の授業の数が同様に5時間となっている。歴史の授業ではどちらも中国史、世界史の教科書を使っている。相違点は、まず時間割の分析からわかるのは、牧畜地域における民族中学校では、歴史の授業は週2時間である。都市部の民族中学校では週当たり3時間となっている。牧畜地域での民族中学校では、8限目は朗読と部活の時間が4時間あるが、その中の1時間を「モンゴル民族の歴史」の特別な授業の時間にあてていた。そこでは、『モンゴル民族の歴史』の教科書が配れていた。都市部でもこの教科書が配布されていたが、授業では使われておらず、ほとんど読まれてもいない。残りの3時間は、モンゴル民族の踊り、民謡、伝統楽器馬頭琴などの演奏活動が行われていた。都市部における民族中学校では、8限目は実習時間が3時間と活動時間が1時間となっていた。この時間では、学生たちが自分の苦手な科目の勉強をしているという。

この2校の学校外における民族教育を比較すると相違点がある。牧畜地域における民族教育学校では、モンゴル民族の伝統的なナーダムに生徒たちが積極的に参加している。都市部における民族中学校では祝日は漢族と同様に祝い、民族伝統文化的な活動は行われていない。ナーダムへの参加もあまりみられない。農耕地域の小学校では、モンゴル語の授業が7時間もあり、モンゴル語の勉強を大事にしていることがわかる。「活動」の時間も週に5時間もあり、モンゴル文化に関する民族舞踊、馬頭琴の演奏を教えていることから、学校側が民族教育に力を入れていることが分かる。

表28 牧畜地域と都市部の民族中学校における民族教育比較

(出典：現地調査の結果に基づき筆者作成。)

比較対象地域	牧畜地域	都市部
--------	------	-----

授業における民族教育の時間割	モンゴル語の授業は週 5 時間である。 「朗読」や「活動」(部活) 2 時間ずつとなっている。また、活動については、民族舞踊・民謡・馬頭琴の演奏等が行われている。	モンゴル語の授業は週 5 時間である。 「実習」時間が 3 時間で、「活動」は 1 時間となっている。8 時限目は自由時間となっている。
世界史と中国史	内モンゴル教育出版社の教科書を使用している。	内モンゴル教育出版社の教科書を使用している。
モンゴル民族歴史の教科書の使用状況	使用している。教科書を基にした特別な授業が週当たり一時間行われている。	使用していない。教科書を配布するのみ。
授業以外の民族教育活動	民族舞踊・民謡・馬頭琴の演奏・ナーダムへの参加・山登り・ウサギ狩り・お寺の参拝。	校内にモンゴルゲルの展示やモンゴル相撲場などの設備の増加。
親の職業	牧畜業従事者は全労働人口の約 86.8%を占める。	第二次第三次産業の従事者は約 49.8%を占める。
教諭の出身地	牧畜地方出身が約 91%を占める。	都市部出身が約 83%を占める。

民族文化教育が都市部と牧畜地域、農耕地域では、学校内における教育と学校外における教育が内容、モンゴル民族伝統文化というところで大きな違いがあることが明らかになった。

都市部の民族中学校で行われている民族教育を、牧畜地域、あるいは農耕地域で行われている民族教育と比較すると、民族伝統文化の体験と民族の歴史認識が欠如していることが明らかになった。しかし、都市部で行われているこのような民族教育は、形だけのものであり、民族の伝統文化を継承していくことができるかどうかは疑問である。それに対して、牧畜地域の民族教育では、生徒たちは、自主的に民族の歴史に興味を持ち、民族伝統文化の行事に積極的に参加している点からも、民族的なアイデンティティを高める役割を果たしていると言える。農耕地域でも、学校側から積極的民族文化教育に力を入れていることは生徒たちにモンゴル文化を伝承させるという役割を果たしていると言える。

以上、本研究では学校統合に伴う民族教育の変化について考察した。特に、①モンゴル語能力の低下、②モンゴル民族の歴史を学習する機会の喪失、③民族文化の伝統行事への参加の減少、④日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失、⑤家庭教育の喪失などが民族教育の変容であると考えられる。さらに、そうした変容がモンゴル民族にとってどのような意味があり、どのような影響があるのか総合的に考察することで、結びとしたい。

日常生活における民族意識の低下が民族教育を変容させ、それにより、民族意識がさらに希薄化するという悪循環に陥っている。このことにより民族教育を変容させている。さらに、民族文化の伝統行事への参加は、民族文化を体験し、理解する機会を与えていた。それは、子供たちの伝統文化に対する好奇心を育て、民族意識を高めることに大きな影響を与えていた。またそれは、伝統文化の継承という民族教育の役割を果たす重要な意義を持っていたと言える。しかしながら、学校統合により民族文化の伝統行事への参加ができなくなった。これにより、生徒の民族意識が希薄化したと考えられる。

学校統合政策による保護者への影響も無視できない。ソムにおいて民族中学校がなくなったことにより、牧民たちの経済的負担が増加した。統合先の学校が家から遠くなり、交通費、高い寄宿生活費などが多くの家庭に負担となり、それが準備できない家庭の子供は学校を中退することになる。このように、ここでは義務教育を保障するという本来の目的から逸脱する事例さえ現れている。また、民族中学校が遠くなったことで、近くの中学校（漢語中学校）に子供を通わせるようになった家庭もあり、民族学校に行く生徒をさらに減少させることになる。

また統合前は、自宅から通う生徒たちを地域の人々が見守りながら社会的な礼儀作法を教えていた。しかし、閉鎖的な寄宿舎生活では社会への参加ができなくなっている。そして家族から離れ、家族から受ける家庭教育の機会を失うことで、学校での学習ができて、モンゴル人としての伝統的モラルや礼儀作法の認識が低下している。

学校統合の結果は、民族教育だけでなく、牧民たちの牧畜生活にも大きな影響を与えている。このように民族教育の変化・変質は、地域社会や日常生活における民族文化の変化と相互に作用しながら、モンゴル民族伝統文や民族意識にも大きな変化をもたらしている。

本研究は、このような国家政策の影響を強く受けて、実際に内モンゴル自治区赤峰市において進められたモンゴル民族学校の統合の実態と学校統合が民族教育に及ぼした影響を分析したものである。また、歴史的な背景により赤峰市は、牧畜地域、農耕地域、都市部から構成されている。そこで、それぞれの地域でのその影響の現れ方の違いについても指摘した。その中でもとりわけ深刻な影響があったのは、牧畜地域のバヤンウンドゥルソムの中学校および民族教育であった。そこでは、民族文化や民族教育を振興するという国家政策の下で実施された学校統合が、その目的とは逆の効果をもたらしめているという現実が明らかとなった。民族文化や民族教育を振興する教育政策は、牧畜地域、農耕地域、都市部など地域の多様性や歴史的背景を丁寧にあまえる必要があるということが、本研究が示唆するところである。そのためには、一律の政策展開ではなく、各地域の内発的な発展を促進するものでなければならない。とりわけモンゴル民族の伝統文化を生活の中で保持している牧畜地域に焦点を当てた政策展開が求められていると考えられる。

### 第3節 今後の課題

ここで得られたこのような示唆は、他の少数民族地域において、国家的な民族文化振興政策を推進する際にも、ふまえられるべきである。星野（2009）は、2000年以降の新疆ウイグル自治区の民族教育について、民族教育政策の背景に、少数民族にとっても中国が祖国であること、少数民族も中華民族の一員であること、少数民族の歴史は中国の歴史の一部であることなど、国家、民族、文化、歴史の認識をはぐくみ、少数民族を中華文化に包摂しようとの狙いがあると指摘した。また、言語についてもバイリンガル教育を実施する過程で、少数民族学校と漢語学校の合併や少数民族の教諭の漢語能力チェックが実施され、実質的に少数民族に対する漢語の国語化が目指されているとも指摘している。本研究では、民族文化や民族教育を振興するという国家政策の下で実施された学校統合が、その目的とは逆の効果をもたらしているという現実が明らかになった。以下では、今後の課題について、二つに分けて述べる。

一つ目は、本論文では、民族小学校と民族中学校に注目して、民族教育の変化を明らかにしている。さらに、民族幼稚園の民族教育の変化が重要な課題であり、研究する必要がある。中国におけるモンゴル民族の幼児の就園者が増える一方、民族教育を受ける幼児人口の割合は減少しているのが現状である。特に、都市部におけるモンゴル民族では、都市化の影響を受け、保護者たちの価値観が変わり、子供を漢語の幼稚園に送る現象が増加している。モンゴル民族にとって、どの言語の学校を選択するかが子供の言語の獲得、アイデンティティの形成などの様々な問題と関係している。

二つ目は、このような教育政策の下での内モンゴルの民族教育の変容が中国の少数民族教育全体にも引き得るということが予測される。中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の民族教育、民族学校についての本研究を、さらに一般化するために、次のような二つの少数民族地域の研究が必要であると考ええる。

第一の調査地は、新疆ウイグル自治区イリカザフ自治州アルタイ地区コクトカイ県は、新疆ウイグル自治区北部のカザフ族地域である。県の総人口は 98,018 人（2016 年）であり、カザフ族が 77,228 人で 78.79% を占め、漢民族、回族、モンゴル族、ロシア族など 12 の民族が共住している。中国政府による遊牧民の定住化政策と農牧業合作政策により、農業と牧畜業の両方を行う人口が 61,572 人で 62.82% を占め、牧畜業のみを行っているものは 24,095 人で 24.58% である。冒茜茜（2018）は、「中国西部地域における少数民族の生計戦略の動態に関する一考察—新疆ウイグル自治区北部カザフ族を中心に」において、カザフ族の生業形態が遊牧から牧畜へ、そして、農牧合作への転換が政府により政策的に進められた結果、外来者（主に漢民族）に牧草地を外来者に提供し、牧畜民は、農業労働者として賃金を受け取る形に変化するケースと農牧業合作社に組織され、耕畜連携による農牧産物の生産・加工・流通・販売など様々な仕事に従事することによって、経営の集約化・効率化の担い手に変化していくケースの、二つの変化を現地調査によって明らかにしている。そうした変化が進行している地域では、民族文化や民族教育の変容が余儀なくされていることが予



想される。そこで、このような地域での民族教育の変容を現地調査によって明らかにしていく必要がある。

第二の調査地は、青海省である。司（2015）は、「青海省における『遊牧民定住化プロジェクト』とそのモンゴル族牧畜社会への影響」において、青海省における「遊牧民定住化プロジェクト」がモンゴル族牧畜社会にどのような影響を及ぼしたかについて明らかにしている。その地域における、民族教育と民族学校の変化を、現地調査によって明らかにしていきたい。なお、青海省海西モンゴル族チベット族自治州は、総人口 37 万人のうち、漢族が 30 万人弱、チベット族 4.1 万人、モンゴル族 2.5 万人で、モンゴル族の民族学校、民族教育とチベット族の民族学校、民族教育の比較検討が可能である。そこで、青海省におけるチベット族の民族教育、民族学校の変容についても、研究していくことが今後の課題である。

## 謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導とご支援を頂いた。心から感謝したい。特に、色々な視点から丁寧にご指導を下された指導教官の亀井伸孝先生に心から御礼を申し上げたい。論文全体の構想から日本語の訂正、さらに様々な形で批判的なコメントを頂き、知的に大きな刺激を得ることができた。本当に感謝したい。また、元指導教官の稲村哲也先生に論文の相談に乗って頂き、数々のご貴重な意見やコメントを頂いた。お礼を申し上げたい。副指導教官の工藤貴正先生、杉山三郎先生、黄 東蘭先生に感謝する。

現地調査段階では、聞き取り調査に協力して下さった現地の牧民、保護者、元教諭や学校関係者、生徒たちにお礼を言いたい。内モンゴル大学のハスエルドン教授と赤峰市モンゴル民族中学の元教諭ヘシグバト先生には数々の助言や情報を頂き、深く感謝したい。また、現地調査の時、お世話になり、写真や情報提供をしてくれた友人のアヤンガ氏に感謝している。

私は、ロータリー米山記念奨学会（2014年度）の奨学金と富士ゼロックス（株）「在日外国人留学生研究助成」（2018年度）を受け、研究に専念することができた。本論文作成に大きな支援と励みになり、関係者の皆さんには心から深くお礼を申し上げたい。

さらに、論文作成時、お世話になった大野明先生、ソロンガ氏、千葉裕太氏、木戸志緒子氏に感謝している。

---

注

<sup>1</sup>岡本雅享（2008）『中国の少数民族教育と言語政策』（社会評論社）では、民族教育を「それぞれの民族が自らの言語や文化を維持するために行う教育である。その役割について、「民族的マイノリティの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育は重要な要素である」（p. 6）と定義している。本論文の定義はこれを参考にした。

<sup>2</sup>人口の少ない地域で、少数人数の生徒を対象に初等教育する施設である。

<sup>3</sup>『世界史』内モンゴル教育出版社、2008年、『中国史』内モンゴル教育出版社、2007年。これらは、人民教育出版社の漢語の教科書を内モンゴル教育出版社がモンゴル語に翻訳した教科書である。

<sup>4</sup>主编 柳子龙・旺吉拉『阿鲁科尔沁旗教育志（续）1998—2007』2008年。以下この節の情報はこの文献による。

<sup>5</sup>内モンゴル自治区義務教育実験教科書『monggol undusuten-u teuhe』（内モンゴル教育出版社）2006年初版、2009年第5版

<sup>6</sup>インタビューの結果は、話の内容を要約して日本語に翻訳して示す。

<sup>7</sup>『世界史』内モンゴル教育出版社、2008年、『中国史』内モンゴル教育出版社、2007年。これらは、人民教育出版社の漢語の教科書を内モンゴル教育出版社がモンゴル語に翻訳した教科書である。

<sup>8</sup>2010年3月10日に実施した事例3のインタビュー対象者と同一人物。当時は歴史の教諭であった。事例6のインタビューは2015年6月20日に実施され、その時はC氏警備員を務めていた。

<sup>9</sup>「ナーダム」とはモンゴル語で〈祭り〉という意味である。モンゴル国、内モンゴルでは草原を舞台にして主に競馬、相撲、弓の三大競技が行われる。また、伝統的民族楽器の馬頭琴の演奏や民族舞踊などを披露することもある。

<sup>10</sup>内モンゴル自治区では、施設、公式文書の表記はモンゴル語・中国語の二言語を用いるように義務づけられている。

## 参考文献

### 日本語

阿拉塔（2011）「中国・内モンゴル地域における民族教育に関する人類学的研究」、広島大学博士（学術）論文、広島大学

アリゴン（2017）「赤峰市のモンゴル語使用状況についての研究」内モンゴル大学博士（学術）論文、内モンゴル大学

阿拉騰巴特爾（2010）「多言語社会における少数民族の変容—現代中国のモンゴル族を中心に」、神戸大学博士論文、神戸大学

稲村哲也（2014）『遊牧・移牧・定牧—モンゴル・チベット・アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版、東京

内モンゴル教育出版社（2007）、『中国史』、内モンゴル教育出版社、人民教育出版社、呼和浩特

内モンゴル教育出版社（2008）、『世界史』、内モンゴル教育出版社、人民教育出版社、呼和浩特

烏力更（2013a）「中国におけるモンゴル民族学校教育の研究」、佛教大学博士論文、pp. 132-133

- 
- 鳥力更 (2013b) 「中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究」、『仏教大学大学院紀要』、第 41 号、pp. 1-17、佛教大学教育学研究科編
- 岡本雅享 (1998) 「中国の少数民族政策と言語政策」社会評論社、東京
- 岡本雅享 (2000) 「中国のマイノリティ政策と国際基準」『現代中国の構造変動』第 7 巻、東京大学出版社、東京
- 小川佳万 (2001) 『社会主義中国における少数民族教育』、東信堂
- 温都日那 (2006) 「多民族混住地域における婚姻と民族意識の関連：内モンゴル赤峰市地域のモンゴル族と漢族の族際婚姻を中心に」、『北東アジア研究 (島根県立大学)』第 10 号、pp. 105-128
- 温都日那 (2007) 『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』溪水社、広島
- 格日樂 (2007) 「中国民族教育における教育自治権について：—民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に—」『中国少数民族の自治と慣習法』、pp. 61-86、成文堂
- 格日樂 (2006) 「中国民族教育における教育自治権について：民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に」『一橋法学』第 5 巻 第 3 号、pp. 1041-1064
- 韓達主編 (1998 年) 『中国少数民族教育史』、p. 103、云南出版社、云南
- 韓達 (1998) 『中国少数民族教育史』第 1 巻～第 4 巻 中国少数民族教育史編委会編、広東教育出版社
- 小長谷有紀 (1991) 『モンゴルの春』河出書房新社、東京
- 小長谷有紀 (1991) 「モンゴルの春—人類学スケッチブック」河出書房新社、東京
- 小長谷有紀・シンジルト・中尾正義 (2007) 『中国の環境政策 生態移民』昭和堂、京都
- 坂元一光 (2000) 「中国新疆ウイグル産育儀礼とその変容：—处理的知識を中心に—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 3 号 (通算第 46 号)、九州大学
- 坂元一光 (2003) 「人類学的子ども・教育研究の組織的展開：—自校史的視点から—」『九州大学大学院教育学研究紀要』、第 6 号 (通算第 49 号)、九州大学
- 司玉潔 (2015) 「青海省における『遊牧民定住化プロジェクト』とそのモンゴル族牧畜社会への影響」、『ヒマラヤ学誌』、16 巻、京都大学ヒマラヤ研究会
- スチンテクス (2013) 「民族衰退の要因」、『内モンゴル社会科学』、4 期、内モンゴル教育出版社 呼和浩特
- ソロンガ (2006) 「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状：都市部のモンゴル族家族の生活実態を中心に」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第 7 号、pp. 205-234、愛知県立大学大学院国際文化研究科、長久手
- 張瓊華 (1996) 「現代中国における二言語教育と学校選択：チベット族出身中学生対象の質問紙調査を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 36 巻、pp. 149-159
- 張瓊華 (2007) 『中国における多文化教育のメカニズムと機能に関する研究—民族共生と社

- 
- 会統合の視点から一』、雄松堂出版、東京
- 東郷育子（1997 年）「中国の少数民族教育政策－国民統合の視点から（下）」、『季刊教育法』、109 期・112 期、エイデル研究所、東京
- ナムラ（2009）「牧畜民から生態移民へ－内モンゴル・シリーンゴル盟を事例として」『人文社会科学研究』、第 18 号、pp. 111-128、千葉大学
- 西村幸次郎（2007）『少数民族中国民族の自治と慣習法』成文堂、東京
- 日本学習社会学会（2007 年）『日本学習社会学会年報』、第 3 号、p. 58、日本学習社会学会
- ハス額爾敦（2005）「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題：内モンゴル自治区の民族教育を中心に」『多元文化』5 巻、名古屋大学、pp. 265-280
- ハス額爾敦（2013）「中国における民族教育の行方－少数民族バイリンガル教育の政策理念と実践を巡って－〔招待講演〕」『比較マイノリティ学』、pp. 37-51 比較マイノリティ学研究会、名古屋
- ハス額爾敦（2017）「牧畜地域の学校配置調整政策の性格とその問題の社会学の研究」、『内モンゴル社会科学』、4 期、1-6、呼和浩特 内モンゴル社会科学雑誌社、フフトホ
- ハスゲレル（2005）「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題」『国際教育』第 11 号、pp. 43-62、日本国際教育学会
- ハスゲレル（2013）『中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状と課題：バイリンガル教育と英語教育の導入に伴う変容を中心に』博士学術論文、首都大学、東京
- ハスゲレル（2016）『中国モンゴル民族教育の変容－バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐる一』、p. 12、現代図書、神奈川
- 費孝通（1999）『費孝通文集』第 11 巻、群言出版社、北京
- ブリンサイン（2003）『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房、東京
- 芒来夫（2007）「中国における民族自治地方の立法自治権－その現状と課題－」『中国少数民族の自治と慣習法』成文堂、pp. 33-60
- ムンクバト（2011）「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育について－西ウジムチン旗の民族学校の統廃合からみる」千葉大学『ユーラシア言語文化論集』13 号、pp. 67-75
- ムンクバト（2013）「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の学校教育の現状について甲・乙式学級の「モンゴル語」教科書比較から」千葉大学『ユーラシア言語文化論集』15 号、pp. 121-130
- ムンクバト（2014）「内モンゴル自治区におけるモンゴル文字の使用について－その使用事例や法律規定からの考察－」『千葉大学人文社会学科研究』第 28 号、pp. 237-247
- 冒茜茜（2018）「中国西部地域における少数民族の生計戦略の動態に関する一考察－新疆ウイグル自治区北部カザフ族を中心に」、『公共政策志林』6 巻、法政大学公共政策研究科
- 毛利和子（1998）『周縁からの中国 民族問題と国家』、東京大学出版社

#### 【中国語】

- 国家统计局人口和就业统计局（2009）「中国人口年鉴 2009」中国统计出版社、北京
- 内蒙古自治区教育厅民族教育处（2004）「内蒙古民族教育工作手册」内蒙古民族教育出版社、呼和浩特市

---

内蒙古自治区教育厅民族教育处（2011）「内蒙古民族教育工作手册」第一辑、内蒙古民族教育出版社、呼和浩特市

内蒙古自治区统计局（2009）「内蒙古统计年鉴 2009」中国统计出版社、北京

内蒙古自治区统计局（2010）「内蒙古统计年鉴 2010」中国统计出版社、北京

乌兰图克（1994）「内蒙古民族教育概况」内蒙古文化出版社、呼伦贝尔市海拉尔区

吴德刚（2010）「中国民族教育研究」教育科学出版社、北京

吴霓等（2015）「中国民族教育发展报告 2013」教育科学出版社、北京

吴长林等（2009）「内蒙古自治区概况」民族出版社、北京

柴扎木苏（1999）「阿鲁科尔沁旗教育志」内蒙古科学技术出版社、赤峰市

柳子龙；旺吉拉（2008）「阿鲁科尔沁旗教育志（续）」内蒙古文化出版社、呼伦贝尔市海拉尔区

扎巴等（2009）「蒙古学百科全书·教育」内蒙古人民出版社、呼和浩特市

内モンゴル科学技術出版社（2003）『アルホルチン統計年鑑』、p. 118、内モンゴル科学技術出版社、フフホト

内モンゴル教育出版社（2004）『内蒙古民族教育工作手册』内モンゴル教育出版社、フフホト

内モンゴル教育出版社（2006年初版、2009年第5版）内モンゴル自治区義務教育実験教科書、原書名：*monggol undusuten-u teuhe*、内モンゴル教育出版社、フフホト

内モンゴル自治区教育厅民族教育所（2004）「内モンゴル民族教育仕事マニュアル」内モンゴル民族教育出版社、フフホト市

内モンゴル自治区教育厅民族教育所（2011）「内モンゴル民族教育仕事マニュアル」第1集、内モンゴル民族教育出版社、フフホト市

内モンゴル自治区統計局（2009）「内モンゴル統計年鑑 2009」中国統計出版社、北京

内モンゴル自治区統計局（2010）「内モンゴル統計年鑑 2010」中国統計出版社、北京

ウラントク（1994）「内モンゴル民族教育の一般的な状況」内モンゴル文化出版社、フルンボイル市ハイラル区

ザバ他（2009）「モンゴル学百科全書・教育」内モンゴル人民出版社、フフホト市

チャイザモソ（1999）「アルホルチン旗教育志」内モンゴル科学技術出版社、赤峰市

柳子竜、旺吉拉（2008）「アルホルチン旗教育志（続）」内モンゴル文化出版社、フルンボイル市ハイラル区